
三学年だよっ！BSAA学園！

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三学年だよっ！BSAA学園！

【Nコード】

N7659S

【作者名】

龍の骨

【あらすじ】

金山企業が倒産して二ヶ月たち、零斗達は三学年になった。しかし、零斗達の前に新たな敵が現る。その名は『暗黒流星団』、目的は世界を闇に包む事である。果たして零斗達は、無事世界を守り、卒業できるのか！？

三年A組の名簿（前書き）

二期のBSAA学園！の始まりです。

まずは三年A組のクラス名簿です。

三年A組の名簿

担任 雪蓮 副担任 ジョツシュ・ストーン

『ゾンビゲームシリーズ B S A A 学園!』

北郷零斗

バレット・フランケン

ライアン・ハート

アリス・チェンバース

アレックス・ウェスカー（アックス）

朱愛

夕化

王原皇呀

『恋姫十無双』

北郷一刀

桃香

愛紗

鈴々

『祝福のカンパネラ』

レスター・メイクラフト

ミネット

カリーナ・ベルリッティ

チエルシー・アーコット

アニエス・ブーランジュ

『リリカルなのは』

高町なのは

フェイト・T・ハラオウン

八神はやて

ユーノ・スクライア（セカンドベガ）

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ

『神無月の巫女』

来栖川姫子

コロナ

ネココ

『百花繚乱サムライガールズ』

徳川千（千姫）

『気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！』
リュウ・ダイチ

『ミルキィホームズ』

シャーロック・シェリンフォード

譲崎ネロ

エルキュール・バートン

コーデリア・グラウカ

『たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！』

竜崎たけし

メイメイ

インフィニット・ストラトス
『IS』

織斑一夏

篠ノ之箒

セシリア・オルコット

シャルロット・デュノア

ラウラ・ボーデヴィツヒ

『緋弾のARIA』

遠山キンジ

神崎・H・ARIA

『アビリティバスターズ』

鹿目タツヤ

美樹翔子

三年A組の名簿（後書き）

零斗

「次回はパワーアップしたマイティ真拳をご披露するぞ！」

一話！ クラスが変わってカオス！春のハジケフィーバー！（前書き）

零斗

「早速一話だ！」

フランケン

「そ、そうだな・・・」

大汗を流すフランケンであった。

一話！ クラスが変わってカオス！春のハジケフィーバー！

金山四天王が倒産して二ヶ月……

BSA学園は、クラス替えを発表し、生徒達はそれぞれ決められたクラスへ移動していた。

三年A組にて……

零斗

「嬉しいでございませ〜す！」

三年A組に決まったのか、零斗は大喜びをしている。

アリス

「零斗とまた一緒にいられるなんて幸せ〜」

好きな人と一緒にのクラスになって幸せそうな顔をするアリス。

夕化

「一緒にのクラスになったな……」

コロナ

「この一年間の内に決着をつけましょう」

ネココ

「そうにゃーの」

夕化達は、零斗を巡っての火花を散らしていた。

正直近寄り難い。

フランケン

「はぁ、零斗と一緒にか……」

一方フランケンは、疲れ気味である。

フランケン

（でも、ハジケない零斗は零斗じゃないしな。悪くないかも）

内心では、喜んでいる。

姫子

「ライアンく〜ん、一緒になれたね!」

ライアン

「あ、ああ……そうだな」

姫子に腕をしがみ付かれて少々困惑気味のライアン。

「キャアアア!」

女子の悲鳴がし、零斗達はそこに向いた。

「この変態! 風穴開けるわよ!」

ツインテールの少女が、二丁のコルトガバメントで逃げている少年に撃っており、少年はそれをかわす。

「俺が何したって言うんだよ！」

「あんた！私のお尻を触ったでしょ！この変態！」

「俺は変態じゃない！スケベだ！」

「どっちも同じよ！」

零斗達は、少女の所に駆けつける。

零斗

「おいおいおいおい、お前等喧嘩すんな。仲良くしな」

すると少女は零斗達に振り向く。

「何言ってるのよ！この変態小僧が私のお尻を触ったのよ！」

零斗は、その少年に向く。

その時、零斗は表情を変える。

零斗

「お前、まさか気力少年ダイチか！？」

少年、ダイチは零斗の言葉を聞いて振り向き、表情を変える

ダイチ

「え！？あなたはマイティ真拳の伝承者！北郷零斗！」

零斗

「あとそれと？」

零斗は少女を向く。

零斗

「神崎・H・アリアか……」

「な、何で知ってるのよ！」

少女、アリアは驚くような顔をする。

零斗

「ダイチいゝ」

ダイチ

「零斗さあゝん！」

ダイチと零斗は、互いに向かっていく。

零斗

「ダイチいゝ」

ダイチ

「零斗さあゝん！」

ダイチは間合いに近付くと飛んでひねり、零斗の肩に乗り、腕を広げる。

零斗 ダイチ

「「ドッキング完了！」」

フランケン

「何のおーーーーー!!!!!!!!!!!!!!?」

零斗とダイチにツッコむフランケン。

アリア

「あんた達何なのよ!?!」

零斗 ダイチ

「俺達は!東京タワー!」

アリア

「意味分らないわよ!」

ダイチと零斗の意味分らない発言にツッコむアリア。

ダイチは零斗から降りる。

零斗

「よし、アックスと朱愛は……」

零斗はアックスと朱愛を探す。

右を見ると、アックスと朱愛がいちゃいちゃしていた。

アックス

「朱愛!一緒にクラスになれたね!」

朱愛

「アックス様、私は嬉しいです」

雰囲気は桃色状態だった。

一夏

「何か、カオスな予感になりそうだな……………」

零斗達を見て大汗を流す一夏。

第

「関わるな一夏、感染するぞ」

セシリア

「そうですね、金山企業を倒産させたとはいえ、ふざけているのに変わりはありませんわ」

鈴音

「そうね、特にム力つくのは、あたしと同じ容姿をした朱愛ね」

そう言つて零斗達を見る一夏達であつた。

ダイチはどうしているかというところ……………

下に巨大なフルーツヨーグルトがあり、飛び降り台に魚の着ぐるみを着たダイチがいた。

その着ぐるみは、魚の臭いがある。

ヨーグルトの中のフルーツ達は慌てている。

ダイチ

「今、フランスでは、魚ヨーグルトは、大ブレイク中があります！」

フルーツ達

「そんな訳無い！そんな訳無い！」

フランケン

「やめろよ！フルーツとハーモニーが台無しになるぞ！」

ダイチを止めようとするフランケン。

ダイチ

「では、いきまゝす！」

そしてヨーグルトへ飛び込み、フルーツ達は逃げていく。

魚の着ぐるみを着たダイチはヨーグルトの中に入った。

しかし、強烈な臭いが出る。

ダイチ

「台無しには、なりませんでした」

フランケン

「なってるから……」

???

「こつちを見るお！……！」

何かの叫び声に、零斗達は向く。

それは、頭以外棒人間になっている劉備ガンダムとシャルロットとラウラだった。

劉備ガンダム シャルロット ラウラ
「「「やあ」「」」

零斗

「ああ——————！！！！！！」

零斗はそんな三人に驚く。

一夏

「ええ——————！！！！！！まさかの感染者！？」

一夏は驚き、箒とセシリアと鈴音は青ざめる。

キンジ

「う、うわぁ・・・」

これを見たキンジも青ざめる。

ダイチ

「ご飯の仇い——————！！！！！！」

如意棒を持って訳が分からない発言をしたダイチにぶつけられ、気絶する。

アリア

「キンジい——————！！！！！！」

キンジがダイチにやられた事により、叫ぶアリア。

たけし

「おお！すげえ！BSAA学園はこんなにすごかったのか！」

メイメイ

「すごいね！すごいね！」

零斗達を見て興奮するたけしとメイメイ。

たけし

「俺も仲間に入れてくれえーーーー！！！！！！！」

たけしはスターライザーを取り出し、メイメイはサークルディフェンサーを取り出して零斗達の方へ行く。

ダイチは後ろからたけしが来る事に気付き、如意棒でたけしの斬撃を受け止める。

そしてたけしとダイチが打ち合う。

一夏

「おい、やめろって！教室がメチャクチャになるだろ！」

シャロ

「いや、凄い事になってますねえ」

ネロ

「いや、おかしいだろ？」

エリー

「何だか、楽しく感じました」

コーデリア

「このまま続いてほしい」

エリーの後ろには、目を光らせたダイチがいる。

ダイチ

「エリー、さあ我とまぐわうぞ！」

エリー

「そ、そんな！ダメだよダイチ君」

そしてダイチは、エリーの服を脱がそうとする。

ダイチ

「良いではないか、良いではないか」

エリー

「あゝれえ」

もちろんエリーはノリノリである。

シャロ

「エリーさんだけです」

コーデリア

「私達も脱がせなさい！」

一刀はふんどし姿で零斗達の方へ行く。

桃香

「ご主人様待つて〜」

愛紗

「私を置いていくと後悔しますぞお〜!!!!!!」

鈴々

「待つのだ」

後から一刀についていく桃香達。

千姫

「あんた達いい加減にしなさいよお——！！！！！！！！！！」

しびれを切らした千姫が、薙刀を持って零斗達に向かっていく。

するとメイメイがサークルディフェンサーで千姫の薙刀を防ぐ。

千姫

「邪魔よ！」

メイメイ

「攻撃するの良くないね！」

そして二人は、睨み合う。

구

「ふふふ、春休み開けにクラス替えになった結果がこれか、悪くな

人間はハジける事によって成長し、強くなる」

そんなわけありません。

ユ

「この一年間、どれだけハジけるか、この僕が見てあげよう」

そう呟きながら零斗達を見るユーノであつた。

夕化

「はあ————！！！！！」

コロナ

「喰らいなさあ——い！！！！！」

ネココ

「にゃーーのおーーー！！！！！」

夕化達は、互いに武器打ち合っている。

フランケン

⌈
•
•
•
•
•
•
•
⌋

そしてフランケン は、黒いオーラを出しながら震えている。

ライアン

「ん？ ヤバいな」

姪子

┐
?
└

静かに言いながら零斗達を廊下に連れ、正座をさせた。

フランケン

「みんなクラス替えをしてからふざけ過ぎだよ！明後日は入学式だ
っていうのにさ！真面目にやってよ！」

フランケンの怒声に、全員ビクッと驚く。

零斗

「そのおゝ何ていうかゝ出来心だったんです」

フランケン

「出来心！？それで済むと思ったたら大間違いだよ！」

零斗はしゅんとする。

箒

「ちよつと待て！シャルロットとラウラはともかく、私達はふざけてないぞ！」

セシリア

「そうですね！こんなのおかしいですわ！」

鈴音

「ふざけてない人にこういう事させるのどうかしてるわよ！」

フランケン

「だったら止めるべきだろお！止めなかった君達も同罪だよ！」

そしてフランケンに驚く箒達であった。

フランケン

「全く！教室に戻るよ！」

教室に戻ろうとするが、隣を見ると、無数のリッカーがいた。

フランケン

「バイオハザードのクリーチャーが何でいるのぉー！！！！！！」

その原因は・・・

雞里トリノの帽子が蓋のように開いており、そこからリッカーリッカーが生まれたという。

フランケン

「あんたかい——！！！！！！！！」

劉備ガンダム

「さあ、この人があなた達のママよお」

女装をした劉備ガンダムが、生まれたてのリッカー達にフランケンがママという事を教える。

リッカー達はフランケンに群がる。

リッ
カー
1

「一々」

これによりフランケン は怒りに震える。

リッカー 2

「お母ちゃん」

フランケン

「もう！ふざけないでって言うてるだろお！！皆大嫌いだあ——」

フランケンの叫びが、学園中に響いたという。

そして零斗達は、雷が直撃するほどダメージを受ける。

ラブ&ピース 第一話 平和

時は幕末！

フランク

「これ時代劇なの!？」

山の木の下で、零斗と女装をした劉備ガンダムがいた。

零斗

「お前のせいで、嫌われちゃっただろ？」

劉備ガンダム

「あなたのせいでしょう？」

零斗

「お前だろ？」

劉備ガンダム

「あなたでしょ？」

そう言い合って十分経過した。

零斗

「明日二人で謝りに行こう」

劉備ガンダム

「そうね」

そして二人はフランケンの所へ行く。

零斗 劉備ガンダム

「「ゴメーヌ」」

これを聞いたフランケンは少し青ざめる。

フランケン

「いや、別にいいけど……」

その後、零斗達は教室に戻り、席に着いた。

そして教室の前の扉が開き、二人の教師が現れた。

これに驚く零斗達。

雪蓮

「今日から三年A組の担任になりました、雪蓮です！」

ジョッシュ

「そして副担任の、ジョッシュ・ストーンです」

こうして三年A組の一年間が、始まるうとしていた。

「話！ クラスが変わってカオス！春のハジケフィーバー！（後書き）」

フランケン

「新しいマイティ真拳なんて無かったぞ！」

零斗

「あ、いっけね。忘れてた」

フランケン

「バカかあ——————！！！！！」

零斗

「次回は遂に新たな敵登場！そして俺の新しいマイティ真拳の技を見せてやるぜ！」

二話！ 入学式に敵登場！？その名は・・・暗黒流星団（前書き）

二話目です！

そして零斗が・・・

二話！ 入学式に敵登場！？その名は……暗黒流星団

入学式当日……

三年A組の教室では、ショートホームルームでジョッシュの話があった。

ジョッシュ

「今日は新入生を迎える入学式なので、昨日の練習を思い出し、緊張感を持つようにしましょう」

生徒達

「はい！」

ジョッシュ

「他に質問は？」

すると後ろの席の一人の手が上がる。

ジョッシュ

「えゝ零斗君」

手を上げたのは零斗だった。

零斗

「新入生の一人がハジケたら、俺ハジケていいですか？」

ジョッシュ

「ダメです」

すると零斗はずっこける。

ジョッシュ

「まあ、入学式が終わるまでハジケちゃダメですよ」

生徒達

「ダメだろ!？」

ジョッシュのボケに、生徒達はツッコむ。

ジョッシュ

「以上、私の話でした。では、入学式では緊張感を持つように」

ジョッシュは教室から出る。

その後、生徒達は教室から出て並ぶ。

零斗

「入学式かあゝ何と言つか懐かしい感じがするし、新入生おめでた
いって感じだよね」

フランケン

「そうだな」

アリス

「でも、私達は卒業生になるんだし、新入生を明るく迎えようよ!」

零斗

「そうだな」

体育館に着き、生徒達はそれぞれクラスが指定されている椅子に座る。

とある遺跡では……

石で作られた棺桶らしき物が並んでいる。

だがその棺桶の内五つの棺桶が闇のオーラを放ち、蓋が震える。

棺桶が開き、中から人や怪人らしき物が出てくる。

一人は白い服を着ており、一夏に似ている少年。

もう一人は、クワガタに似た怪人である。

そしてツインテールで魔装少女の衣装姿と日本刀を持った少女。

右目に眼帯をしており、学生服姿と長刀にも見える大鋏を持った少女。

最後は全身が銀色で腹に『丹田エンジン』という機械が組み込まれている人造人間。

???

「今、世界を闇に包む時……行こう……」

少年達は闇のオーラに包まれ、遺跡から出て空を飛ぶ。

その頃、BSAA学園では……

ウェスカー

「新入生の皆さん、どんな困難でも立ち向かい、頑張ってくださいませよう。以上、私からの話でした」

理事長であるウェスカーの話が終わったところだった。

零斗

（いよいよ新入生代表の言葉か……それにしても、何か近付いてくるような気がする）

零斗は何かの危険を感じていた。

そして新入生代表の言葉が始まる。

その時だった……

グラウンドから何かの爆発音がし、生徒達はざわめいた。

フランケン

「な、何だあ!？」

零斗

「やっぱりな!俺の嫌な予感が当たってたぜ!」

一刀

「それより、生徒達を避難させないと」

零斗

「そうだな、キンジ!アリア!生徒達を避難させろ!新入生も含め

てな」

キンジ

「おう！」

アリア

「分かったわ！」

キンジとアリアは、新入生を含む生徒達を、避難場所へ誘導させる。
BSAA学園の避難場所は、男子寮の側にある地下に続く階段である。

フランケン

「零斗はどうするの！？」

零斗

「俺はグランドへ行くぜ！」

一刀

「おい待てよ！」

アリス

「待つてよぉ」

零斗はすぐにグランドへ向かい、後からフランケン達も行く。

しかしフランケン達は零斗に止められ、避難場所へ行った。

グランドに着き、零斗は白いオーラを出す。

砂煙が晴れると、零斗は驚愕する顔をする。

????

「この世界を、闇に包む」

????2

「今の時代には、欲望が沢山ありそうだな」

????3

「百年ぶりだな……」

????4

「……………」

????5

「ふふふふ……」

謎の五人組は、黒いオーラを放つ。

零斗

「誰だデメエらは！」

すると五人組はゆっくり歩く。

????

「僕の名はテル……」

????2

「俺はウヴァ」

「???3

「私はNo.15のセス」

「???4

「私は京子」

「???5

「柳生義仙……」

テル

「僕達は、暗黒流星団!」

そしてテル達は、黒いオーラを再び放つ。

零斗

「こ、こいつら……ヤベエぞ!」

そしてテルは、ゆっくり零斗に近付く。

零斗

「な、何だ!？」

零斗の近くで止まり、前蹴りをする。

前蹴りをされた零斗は、10m吹き飛んだ。

零斗

「ま、前蹴りだけで……」

腹を抑えながら立ち上がる。

テル

「安心しろ、本気を出していない……」

零斗

「あれが？チートじゃねえか」

そして零斗は構え、白いオーラを放つ。

零斗

「マイティ真拳奥義！」

しかし、技を出す暇も無く、フックで5m吹っ飛ぶ。

零斗

「こはあ！！！！」

そして零斗は、壁に叩きつけられる。

義仙

「ふふふふ、テル様はどこぞの人間と違って超人ですよ」

京子

「あーら、金山企業を滅ぼしたマイティ真拳使いが、こんな程度だったなんて」

ウヴァ

「失望したぜ」

セス

「弱者だな」

義仙達は笑う。

零斗

「何て強さだ．．．．．バ力強い．．．．．」

そしてテルは、零斗の首を掴む。

零斗

「うう、ああ．．．．．」

テル

「かつて僕と互角だった初代マイティ真拳使いとは大違いだ。しかし今になってからは弱くなっている」

テルは零斗を地面に叩きつけ、体育館へ投げる。

零斗はうまく受身を取る。

零斗

「神聖なるマイティ真拳を侮辱するのか!？」

テル

「今のマイティ真拳は、お前が百代目の伝承者になってからは弱くなっていると言っている」

零斗

「ダメエ!」

怒りを露にし、白いオーラを出す。

テル

「貴様には、マイティ真拳を使う資格は無い」

零斗

「資格が無いだと!？」

テル

「知らなかったか？マイティ真拳の本当の恐ろしさを……」

零斗

「何っ!？」

テル

「だが、教えない」

テルは零斗の間合いに入り、膝蹴りをする。

零斗は吐血し、腹を抑えて倒れる。

テル

「弱いな、貴様は弱すぎる!」

倒れている零斗を二階の教室を目掛けて蹴り飛ばす。

教室の窓が割れると同時に、並んでいた机が乱れる。

零斗

「ぐ、うう……」

大きなダメージを受けながらも立ち上がり、白いオーラを出す。

零斗

「ま、マイティ真拳奥義……」

背中から赤い翼が生え、零斗は助走をつけて教室から飛ぶ。

零斗

「フェニックスの翼！」

そして零斗は空中を飛び回る。

零斗

（空中戦なら、奴も不利だ。だったら奇襲攻撃には弱いはず……）

そう思っていた零斗だが……

テル

「甘いよ？」

後ろを振り向くと、テルがいつの間にかいた。

零斗

「何っ！？」

テルは身体を捻らせて回転し、蹴り落とす。

蹴り落とされた事により、地面に叩きつけられる。

零斗

「うう、いつてえ……チートか？……百年前の奴ってこんなにチートだったのか！？」

テルは浮きながら零斗を見下ろす。

テル

「貴様の考えはお見通しだ」

零斗

「お前等、強すぎ……」

テル

「トドメと行くか……」

テルの手から黒い塊が浮き、黒いオーラを吸い取って大きくなる。

テル

「百代目マイティ真拳伝承者よ、闇に葬れ……」

そして黒い塊を投げ、零斗は目を閉じる。

その時、炎に包まれた矢が黒い塊を貫き、爆発する。

零斗は隣を見ると、炎に包まれた弓を持った少年がいた。

その少年は……

???

「俺は鹿目タツヤ、マイティフレイムの使い手……」

零斗

「た、タツヤ！やめろ！お前ではすぐにやられるぞ！」

タツヤ

「なぐに、大丈夫だ。俺は死なない」

そしてタツヤは、テルに攻撃を仕掛ける。

テルは防ぐが、少しダメージを受ける。

テル

「ぐっ！こいつ……」

タツヤはテルの隙を探すように攻撃し続ける。

テル

「く、くどい！」

テルは振りほどくようにバックハンドブローで吹き飛ばし、タツヤはうまく受身を取る。

タツヤ

「へっ！お前、強そうだな」

テル

「ほお、貴様もやるな」

互いに睨み合う二人。

その時・・・・・・・・

フランケン

「零斗おーーーーー!!!!!!」

避難していた筈の三年A組の生徒達が現れ、零斗の所へ駆けつける。

テル

「チツ引き上げるぞ!」

テル達は黒いオーラを放ち、空へ飛んだ。

フランケン

「零斗!何なんだ!?!」

フランケンは空に光っている五つの黒い光を見る。

セシリア

「ああ!ボロボロになってますわ!」

セシリアはボロボロになった零斗を見て驚く。

しかし、零斗は気絶している。

フランケン

「誰か!手を貸してくれ」

こうして零斗は、フランケンと一夏によって保健室へ運ばれた。

その頃、暗黒流星団は……

ウヴァ

「良いのか？ トドメを刺せば、世界を闇に包む事が出来るはずだ」

テル

「ウヴァ、言葉を慎め」

セス

「ですが良いのですか？」

テル

「すぐに殺すのはつまらない。零斗が強くなるまで、僕は待つ」

テル達は、アフリカ方面に飛んでいった。

BSAA学園の保健室では……

零斗

「ん、んんゝ何だ？」

気絶していた零斗は、ようやく目覚めたところだった。

アリス

「零斗おー！！！！」

アリスは零斗が目覚め、抱きつく。

零斗

「アリス・・・・・・・・」

アリス

「良かったよぉ〜良かったよぉ〜」

アリスは涙を流す。

零斗

（俺は確かに百代目伝承者だ。でも弱くなっているっていうのはどういう事なんだ？）

そう疑問に抱く零斗であった。

二話！ 入学式に敵登場！？その名は・・・暗黒流星団（後書き）

フランケン

「ちよっと！新しいマイティ真拳を出すどころが零斗敗北したよ！？」

すみません、そうしたかったのですが・・・

フランケン

「おいーーーー！！！！！」

皇牙

「次回はある転校生が来るぞ。そして零斗が仲間と暗黒流星団に向けて特訓！？」

三話！ 秘密の特訓！？謎の転校生現る。（前書き）

今回はウヴァのキャラが壊れます。

そして爆発王さん、本編がまだ連載中であるため、爆発王さんのキヤラの登場はしばらく先になると思います。

申し訳ありません！

三話！ 秘密の特訓！？謎の転校生現る。

B S A A 学園の三年 A 組にて・・・

零斗はチラシらしき紙を見ていた。

フランケン

「零斗、何を見てるんだい？」

フランケンはその紙を見る。

その紙は、『世界武闘大会！』と書いてあったチラシである。

これを見たフランケンは言葉を失う。

零斗

「今度、俺はこの大会が出るんだ。奴等を倒す為に」

フランケン

「零斗、いくらなんでも無謀過ぎだよ！」

零斗

「どついつ事？」

フランケン

「世界武闘大会というのは、世界の強豪が集う武闘大会だよ！零斗
じゃ一回戦で負けるよ！」

零斗

「一回戦で？馬鹿を言っなよ。日本武闘大会で優勝したこの俺が、負ける訳ねえだろ」

フランケン

「日本の武闘家よりも強いんだよ！？」

零斗が持っているチラシに、『主催地 イギリスローマの闘技場』と書いてあった。

零斗

「イギリスのローマか、確かルツキーニが生まれた国だったな」

フランケン

「え！？まさか」

零斗

「多分だと思うが、ルツキーニも参加するんじゃないかと思う」

これを聞いたフランケンは言葉を失う。

零斗

「それが観戦かもしれないな」

フランケン

「だよね、ストライクウィッチーズとはいえ、武闘家に敵うかどうかかわからないし」

零斗

「そつだな」

するとアリスがやって来る。

アリス

「零斗く～なに見てるの～？」

そしてアリスは武闘大会のチラシを見た。

アリス

「零斗く～武闘大会に出るの？」

零斗

「ああ～出るぜ～。開催するのは夏休みが始まってからだ」

アリス

「でも～強い人ばかりでしょ？」

零斗

「修行すれば、世界に通用するかもしれないぜ」

アリス

「零斗く～頑張つて～」

零斗とアリスは盛り上がっているが、フランケンに取り残されている気分になっていた。

フランケン

（何だろう、零斗とアリスを見ているとすごく寂しく感じる）

チャイムが鳴り、零斗達は席に着き、雪蓮とジョッシュが入ってくる。

ライアン

「起立、気を付け、礼」

ライアンの号令で、挨拶をする。

ライアンが「着席」というと、全員座る。

雪蓮

「今日は、転校生が来ます」

アックス

「先生、その転校生はどんな人ですか？」

雪蓮

「それは楽しみに」

アリア

「先生、その転校生はキンジを狙いますか？」

愛紗

「先生、その転校生は昆布を好みますか？」

これを見たフランケンは少し驚く。

フランケン

（え！？愛紗まさかのキャラ崩壊！？）

雪蓮

「皆落ち着いて。では、どうぞ」

教室に入ってきたのは、緑色のショートヘアの青年である。

青年は黒板に自分の名前を書く。

青年

「風見ソウスケです。よろしくお願いします」

雪蓮

「はい、ソウスケ君は神奈川の『ソード&ガン学園』から転校したんですよ」

これを聞いた生徒達はざわめく。

キンジ

「ソード&ガン学園って剣と銃専門の高等学校の……」

一夏

「けど最近では、黒い噂が絶えないとか……」

アリア

「昔は評判が良いのに」

雪蓮

「皆さん静かに、ソウスケ君はこの学園で一年間皆さんと過ごします。仲良くしてあげてね」

こうしてHRが終わり、一時間目の授業後の休み時間になった。

ソウスケは席に座っている零斗に寄る。

ソウスケ

「やあ、北郷零斗君だよな」

零斗

「ああ、そうだが？」

ソウスケ

「やっぱり！金山企業を倒産させたマイティ真拳使いの零斗だ！」

零斗

「全国で有名になったな。俺」

ソウスケ

「君、確かあの暗黒流星団という奴等に完膚なきまでやられたんでしょ？」

零斗

「なんで知ってたんだ？」

ソウスケ

「B S A A 学園に、僕の知り合いがいるんだ。その人から聞いた」

零斗

「それで、笑いに來たのか？」

ソウスケ

「とんでもない。暗黒流星団に匹敵する程強くなれるかを教えよう
とね」

これを聞いた零斗は、驚愕する。

零斗

「強くなる方法だと？」

ソウスケ

「確か戦士達の聖地『バトルグランド』で修行すれば暗黒流星団と互角になるほど強くなれるよ」

零斗

「へえ、そのバトルグランドっていう場所は？」

ソウスケ

「放課後教えてあげるよ。玄関に来てね」

零斗

「おうよ！！！！」

チャイムがなり、生徒達は席に着く。

こうして時間が過ぎ、放課後になった。

ソウスケは玄関で零斗を待っている。

ソウスケ

「あつ、零斗君」

やって来たのは、零斗とフランケンとアリスと一刀と皇呀とたけしとダイチとタツヤである。

零斗

「すまねえなソウスケ。フランケン達がどうしても行きたいとかいってさあゝ」

ソウスケ

「大丈夫だよ。皆で一緒に行けば楽しいし。あ、クラスの皆には内緒だよ」

零斗

「分かってるって」

そして校門を出て、歩く零斗達であった。

その頃、暗黒流星団では……

黒い鉄仮面に黒装束を着た戦闘員達がテルにひかえている。

テル

「何？零斗達がバトルグラウンドに向かっている？」

影星

「そのようでございます」

影星2

「どうやら我らテル様に匹敵する程の力を手に入れようとしている可能性が高いです」

テル

「そうか、報告はこれだけか？」

影星

「はっ！」

テル

「ウヴァ！」

テルが掛け声をする、ウヴァがやって来た。

ウヴァ

「お呼びか？」

テル

「影星達を率いてバトルグラウンドに行け。零斗達より先回りをしろ」

ウヴァ

「先回りか。承知したぜ」

そしてウヴァと影星達はその場で消える。

その頃、零斗達は……

零斗

「おお！ここがバトルグラウンド！」

目の前には、アスレチックや武術を鍛練する人達等があった。

フランケン

「東京タワーの地下にこんな特訓場所があったなんて」

タツヤ

「これは燃えてきたぜ！」

たけし

「そうだな、暗黒流星団に向けて特訓しなきゃ」

ダイチ

「腕が唸るぜ！」

たけしとタツヤとダイチはウズウズしていた。

一刀

「さて、行くか」

皇呀

「そうだな」

フランケン

「ちょっと待ってよ！どこに！？」

一刀

「決まってんだろ」

皇呀

「自分に合った特訓部屋へ行くんだよ」

フランケン

「でも場所分かるの！？」

ソウスケ

「大丈夫だよ」

ソウスケはそう言うが、零斗達は散って行った。

フランケン

（なんか、不安……）

これを見てフランケンは、不安に思うのであった。

ダイチは……

ダイチ

「さあ、来いや！」

飛んでくる野球のボールを弾く槍術、棒術専用のステージ『槍と棒の森林』で如意棒を持って構えていた。

四方からボールが大量に飛んでくる。

ダイチはそのボールを弾く。

たけしと一刀は……

たけし

「一刀さん、よろしくお願いします！」

一刀

「言われなくとも」

地面から出てくる丸太を剣で斬る剣専用のステージ『剣の鍛練洞窟』で一刀は日本刀を構え、たけしはスターライザーを構えていた。

地面から丸太が出てきた時、一刀とたけしは斬る。

斬った丸太は地面に引っ込み、今度は斬った丸太より太い丸太が出てくる。

このステージは、出てくる丸太を斬ればその丸太より太い丸太が出てくる。

斬れば斬るほど太くなり、難易度が高くなる。

アリスは……

アリス

「よーっし！いつくよー！」

放ってくる矢を二つの剣で弾く双剣専用のステージ『双剣の江戸』で二つの日本刀を構えていた。

矢が放ち、アリスは日本刀で弾く。

アリス

「すごい。これになるよー」

皇呀とタツヤは……

皇呀

「……………」

タツヤ

「かかって来いよ!!!!!!」

向かってくる胴着を着たロボットを倒す無手専用のステージ『無手道場』で構えていた。

ロボット達は皇呀とタツヤにかかるが、一体ずつ倒されていく。

フランケンは……

フランケン

「うわぁ……」

浮いている風船を突いて割るレイピア使い専用の『レイピアの風船遊園地』でレイピアを構えていた。

フランケンは浮いている風船をすかさず割る。

零斗は……

零斗

「くっ！こいつは強いぜ！」

バーチャルメガネを使って自分にあった対戦相手と戦うステージ『バーチャル都市』で『DOGDAYS』のシンク・イズミと戦っていた。

バーチャルなので、喋らない。

零斗

（ぐっ！やっぱりテルのレベルに設定しても俺がぶっ飛ばされるの

か)

そしてシンクの攻撃をかわしながら考える零斗であった。

零斗

(俺の弱点さえ見つければ勝てるような・・・弱点?)

零斗はテルとの戦いを思い出し、シンクの攻撃を防ぐ。

零斗

(弱点・・・弱点・・・はっ！分かったぞ！)

シンクの棒を弾き、後ろ回し蹴りをする。

零斗

(どうやら弱点があったようだ)

シンクは棒を零斗にぶつけるが、防がれる。

零斗

(防御技が少ないって事か！攻撃こそ最大の防御だが、相手より早く攻撃をされそうな時の防御技が無きゃダメだということか)

自分の弱点に気付いた零斗は、シンクを押し返す。

零斗は白いオーラを出して構える。

零斗

「さあいくぜ！マイティ真拳奥義！」

拳を地面にぶつけ、地面から土の壁が出てくる。

シンクの攻撃は、土の壁によって防がれた。

零斗

「これぞ防御技！土壁シールド！」

土の壁はバラバラになり、零斗はシンクへ走る。

零斗

「マイティ真拳カウンター奥義！！！！サマーソルトエクスプローション！！！！！」

三連続のサマーソルトキックを喰らわせ、シンクは気絶する。

零斗はバーチャルメガネを外す。

零斗

「これで弱点は克服された。暗黒流星団が来てもおかしくない」

こうして零斗は、バーチャル都市から出る。

中央広場でフランケン達と合流し、帰る準備をする。

ソウスケ

「どうだった？バトルグラウンドで特訓した気分は」

零斗

「為になったぜ」

フランケン

「俺もだ。簡単そうに見えたけど凄く大変だったよ」

一刀

「我流マイティ真拳が強くなった感じた」

ソウスケ

「良かった〜それじゃあ帰ろ？」

零斗

「そうだな、暗黒流星団が明日来たら、俺達で……」

????

「暗黒流星団が何だって？」

零斗達は後ろを振り向くと、緑色のジャンパーを着た青年がおり、零斗達に近付く。

零斗

「お前、一人か？」

青年

「一人だけだと思うか？」

青年は右手を上げると、鉤爪を持った影星達が現れ、零斗達を囲む。

青年

「全く」

そして青年はウヴァとなる。

零斗

「お前、一体……」

ウヴァ

「俺は暗黒流星団の幹部、ウヴァ」

零斗

「ウヴァ？ああ俺達の学園に襲撃してきたテルと一緒にいた怪人か」

ウヴァ

「お前達、俺達に匹敵する程特訓していたようだな。その特訓の成果を見せてもらおうか？」

ウヴァの合図で影星達は零斗達にかかる。

零斗

「見せてやろうぜ。特訓の成果をな！」

零斗は向かってくる影星達を一人ずつ倒し、後ろから襲いかかる影星を投げ飛ばす。

たけし

「はっ！てやあ！とりゃあ！」

たけしはスターライザーで鉤爪攻撃を防ぎ、押し返して斬っている。

たけし

「さあ行くぜ！秘剣！超力ライザー！」

超力ライザーで五人の影星がやられる。

影星達

「おおーーーーー！！！！！！」

一刀

「我流マイティ真拳奥義、大紅蓮斬！！！！」

刀を炎に纏わせ、吹き飛ばす。

アリス

「おりゃおりゃおりゃーーーーー！」

ダイチ

「はいはいはいはいーーーーー！！！！」

アリスは二つの日本刀で斬り、ダイチは如意棒で吹き飛ばしていた。

ダイチ

「うひょーーーーー！奴等が飛んでくるボールだと思えば怖くねえな
！」

アリス

「飛んでくる矢を弾くという感覚を忘れなければ大丈夫だね！」

タツヤ

「オラオラ火傷すつぞ！」

タツヤはマイティフレイムを用いて戦っていた。

皇呀

「破天荒真拳奥義！獅子猛突拳！！！！」

皇呀は無数の突きを影星達を浴びせる。

零斗達の戦いを見ているウヴァは……

ウヴァ

「これが成果か、くだらない」

影星達は全滅してしまい、零斗はウヴァに近付く。

零斗

「ウヴァ、どうだ？これが俺達の成果だ」

ウヴァ

「それで勝ったつもりか？」

零斗

「残念だが、お前を倒して暗黒流星団を潰す！」

無数のパンチを放ち、ウヴァはそれを弾く。

そして回し蹴りをし、ウヴァは防ぐ。

零斗

「へえやるじゃん」

ウヴァ

「これぐらい当然だろう」

角から緑色の電気を放ち、零斗はその場から離れる。

零斗

「電気か」

ウヴァ

「俺の電気は当たると死ぬぞ」

零斗

「そうかい！」

そして零斗はウヴァの攻撃をかわし、手首を掴んで投げ飛ばす。

ウヴァはなんとか受け身を取る。

ウヴァ

「バカだな。間合いだ」

零斗

「それがどうした！」

ウヴァは角から電気を放ち、零斗は直撃し、痺れて倒れる。

ウヴァ

「今の電気はスタンガンより弱めだ」

零斗

（ぐっ、あの角をなんとかしないと・・・）

痺れながらもなんとか立ち上がる。

零斗

（こうなりゃ一か八かでやるしかねえ）

白いオーラを出し、構える。

ウヴァ

「何だ!？」

零斗

「マイティ真拳奥義いゝ!」

そして高く跳び、右手が赤く光出し、その状態でウヴァの角を切り落とす。

ウヴァ

「ギャアアアアアア!俺の角があーーーーー!!!!!!」

零斗

「赤いチョップの彗星、赤チョップマン!」

角を切り落とされたウヴァは落ちた角を拾う。

零斗

「どうだ?分かったろ?」

ウヴァ

「北郷零斗!角の恨み、会ったときには晴らしてやる!」

そう捨て台詞を言い、黒いオーラに包まれて消える。

ソウスケは零斗達に駆けつける。

ソウスケ

「大丈夫かい？」

零斗

「ああ、大丈夫だ」

ソウスケ

「良かった」

こうしてバトルグランドから出てそれぞれ帰宅していった。

おまけ

ウヴァ

「うう、俺の角お」

京子

「全く、何やられてるのよ」

ウヴァは京子に接着剤で角をつけてもらっていた。

義仙

「あゝこの義仙の癒しで、ウヴァ様をもっと強くしてあげても

よろしいのに」

ウヴァ

「お前の癒しの場合、凄く寒気がするんだが……」

セス

「では私が癒し差し上げましょうか？」

ウヴァ

「お前はもつと嫌！」

グダグダしている一方のテルは、星を見ていた。

テル

（ウヴァの角を折るなんて、北郷零斗、お前は何故強くなるうとする）

そう思いながらウヴァ達の方へいくのであった。

三話！ 秘密の特訓！？謎の転校生現る。（後書き）

今回登場した戦闘員は烈火竜さんが考えてくれた戦闘員です。

影星

武器

鉤爪 ワイヤー

暗黒流星団の戦闘員。黒い鉄仮面に黒い装束服姿であり、素早い身のこなしと隠蔽術で主に偵察や暗殺を得意とする。

烈火竜さん、ありがとうございました。

四話！ 守れ！貴重な宝石！合言葉は…ばよよん固くなくい（前書き）

風見ソウスケ

イメージCV 関智一

容姿 爽やかショートヘアに顔はイケメン、服装は青色のYシャツにジャージパンとスニーカーを履いている。

年齢 18

性格 マイペースで心優しいが、怒ると怖い

ソード&ガン学園から転校してきた男子生徒。一人称は「僕」

銃の腕は未熟だが、剣の腕は天下一品であり、居合いを得意とする。

『戦国BASARAシリーズ』の石田三成がお気に入りであり、コスプレをして人前等関係無く物真似を良くする。本人曰く「三成と同じ声だから」である。

四話！ 守れ！貴重な宝石！合言葉は…ばよよん固くなん

新宿の美術館にて…

零斗とキンジとアリアは、飾ってある宝石を見張るように立っている。

零斗

「はあゝ見張りかあゝ。面倒だぜ」

キンジ

「お前、さっきからそればっかだぞ」

アリア

「そつよ零斗、しっかりしなさい」

面倒だと言っている零斗に注意するキンジとアリア。

彼らはウェスカーに美術館にある『女神の涙』という宝石を守る仕事を与えられたからである。

零斗

「武闘大会までの修行だつてのにさゝ」

キンジ

「零斗、武闘大会までは余裕があるんだ。たまにはこついう仕事を受けても良いだろう」

零斗

「キンジいゝそう言つて俺より先に武闘大会に参加する気なのか？」

キンジ

「おいおい、俺は参加しねえよ。むしろ観客席が俺には似合つんだよ」

零斗

「そうですか、でも俺は大会まで修行するぜ」

その頃、暗黒流星団は…

テル

「……………」

テルは空を見ており、後ろではウヴァ達が見守っている。

ウヴァ

「また見ているな」

セス

「そうですね、それよりウヴァ、角が微妙にズレているんだが」

ウヴァ

「え？ズレてる！？」

手鏡を取り出し、自分の顔を見る。

ウヴァ

「ホントだ、ズレてる！」

義仙

「京子さん？あなたちゃんとくつつけましたか？」

京子

「ちゃんと付けたわよ！私の接着剤は固まるのに時間が掛かるのよ！」

テル

「落ち着け義仙、京子」

テルは義仙と京子を制止する。

テル

「新宿の美術館にある『女神の涙』という宝石がある。あの宝石には、特別な力が宿つてると言われている」

セス

「ならば潜入して盗むというのはどうでしょう？」

テル

「だがその美術館は守りが厳重で、零斗とキンジと言った男とアリアと言った女がいる。女神の涙を取った瞬間、警報が鳴る」

ウヴァ

「ならばこの俺が！」

テルはウヴァの角を掴む。

ウヴァ

「あ、やめて下さいテル様ぁー！ー！ー！俺の角は大変貴重なん

です！」

テル

「よし、今度からウヴァは角キャラという事にしよう」

京子

「テル様、角キャラって何ですか！？しかもウヴァの角、私が治したんですよ！？」

テルのクールボケにツッコむ京子。

そしてテルは角を持ったまま投げ、ウヴァはゴミ箱に逆さまに入っ
た。

テル

「ウヴァは暫く電撃が使えない。誰か潜入して女神の涙を盗んで
てくれないかな？」

セス達はこれを聞いて考える。

????

「それなら、僕に任せてよ」

セス達は振り向くと、黒いローブを来た青年だった。

テル

「やってくれるのか」

????

「まあ、女神の涙くらい、朝飯前だよ」

セス

「テル様にその口を利くとはどういう・・・」

セスは前に出ようとするが、テルに止められる。

テル

「その自信、無駄にはするな」

???

「分かったよ」

青年はその場で消えた。

しかし、ウヴァはゴミ箱に入っただけである。

ウヴァ

「タスケテ・・・」

場所を戻して新宿の美術館にて・・・

零斗

「全く変化無し、退屈だ」

キンジ

「退屈してお前なあ」

零斗

「はあく修行してねえからなまっちゃまうぜ」

アリア

「あんただんだけバトルマニア？少しは我慢しなさい」

零斗

「わがママを言うお子様は黙ってくれ」

アリア

「あんた風穴開けるわよ！！！！」

アリアは銃を取り出そうとするが、キンジに止められる。

キンジ

「やめろアリア！」

アリア

「離してキンジ！こいつムカつくのよ！」

アリアは更に暴れるが、キンジは必死に止めている。

零斗

「あゝあ、こりゃ大変だな」

キンジ

「他人事みたいに言うなよ！」

零斗

「よし分かった！お詫びに俺のハジケをご披露しますよ」

キンジ

「ハジケってお前」

零斗

「行くぞ！これが俺のハジケだ！」

零斗劇場　フィギュア達の声

十年前、零斗は物心がついた頃はフィギュア達の声が聞えるようになったという。

零斗はフィギュアショップに入り、目を輝かせて美少女フィギュアを見る。

セシリア・オルコットのフィギュア

『あら？男の子ですね〜』

零斗

「うわぁ！」

零斗はフィギュアが喋って驚くように尻餅をつき、周りの常連客は見ている。

零斗

「今フィギュアが喋った！フィギュアが喋ったよ！」

常連客

「え？フィギュアは喋った？おかしい事言っちゃダメだよ君」

常連客はそのまま店を出て、零斗は首をかしげる。

零斗には置いてあるフィギュア達が楽しく話している声が聞こえたのであった。

そのままフィギュアショップの店員に聞いた。

零斗

「どうして僕はフィギュアの声が聞こえるの？」

これを聞いた店員は驚く。

店員

「君もなのか!？」

零斗

「え!？おじさんも!？」

店員がフィギュアの声が聞こえる事に驚く零斗。

その後、店員は零斗と一緒に河川敷に行った。

店員

「なるほど、何で自分だけフィギュアの声が聞こえるのか、俺は小さい頃、君と同じく不思議に思っちゃったんだ」

零斗

「そうなの？」

店員

「フィギュアの声が聞いたときは驚いたよ。周りの人が聞こえなくて、俺だけ聞こえる。君を見ていたら、小さい頃を思い出すよ」

零斗はオレンジジュースを飲む。

店員

「ただ分かるのは、フィギュア達に心がある事だ」

零斗

「フィギュアに？」

店員

「フィギュアの声を聞いて、心があるんだなと思ったんだ。フィギュア達は大切にしてくれる人を待っているんだ」

零斗

「そうなんだ。じゃあフィギュア達は待っているんだね！」

店員

「ああ、待っているんだ」

こうして店員は夕陽が沈むとともに去り、それを零斗は見送った。

零斗劇場 フィギュア達の声 完

零斗

「うおおーーーー凄く懐かしいーーーー！！！！！」

懐かしさに零斗は涙を流し、キンジとアリアはドン引きする。

キンジ

「フィギュアの声が聞こえるって……」

アリア

「零斗、ふざけてるの?」

零斗

「ふざけてねえよ」

キンジ

「本当に聞えるのか?」

零斗

「……さあ?」

他人事のような返答でキンジとアリアはずっこける。

零斗

「それより……ピラフ食いてえ……!……!」

キンジ

「いきなり何叫んでんだよ!」

零斗

「ピラフ食いてえ……!……!」

そして零斗は『ピラフ』と連呼しながら走り去った。

キンジ

「おい零斗!」

アリア

「バカキンジ！零斗を連れ戻してきなさい！」

キンジ

「んな事言われたってあんなスピードじゃ俺でも追いつかないぞ！」

アリア

「ごたごた言ってる風穴開けるわよ！」

こうしてキンジとアリアの口喧嘩が美術館に響いたという。

女神の涙を警備してから夜になり、キンジは眠そうな顔をしている。

キンジ

「夜になっても零斗が来ねえ……」

アリア

「ホント、あいつは腰抜けなのかふざけてるのか分からないわ」

キンジ

「しかもハジケって何だよ？」

アリア

「私に聞かれても困るわよ」

女神の涙の上の天井の扉が開き、先端に鉤が着いているワイヤーが出てくる。

キンジはそれに気付くようにベレッダを取り出し、鉤に撃ち、ワイヤーが切れる。

アリア

「キンジ何やってんのよ!？」

キンジ

「アリア!よく見てみる!」

アリアは女神の涙に近付き、足元を見る。

アリア

「そついう事だったのね」

キンジ

「ああ、出て来い!もう分かってるんだ!」

キンジは天井の入り口に向かって叫ぶ。

???

「ふ、バレちゃったね」

入り口から飛び降りてきたのは、ライオンとトラとチーターを混ぜ合わせたような怪人だった。

キンジ

「お前、暗黒流星団のウヴァなのか!？」

???

「違うよ、僕は暗黒流星団親衛隊隊長、暗殺部隊隊長のカザリ、あの角折れウヴァと一緒にしないで欲しいな」

アリア
「!？」

カザリと聞いたアリアは、何かを思い出したかのような顔をする。

アリア

「カザリ、ママを冤罪にさせたグリード……」

カザリ

「ん？君は確か、神崎かなえの娘、神崎・H・アリア、君の母親に感謝しないと。お陰でウヴァを蹴落とす時が近付いたってね」

アリアは二丁のコルト・ガバメントを取り出し、カザリに向ける。

アリア

「あんた、その為にママを……」

カザリ

「悪いけど君みたいな子供には用は無い、女神の涙を頂戴させてもらうよ」

アリアは発砲し、カザリは銃弾をかわす。

キンジは止めるようにアリアの両手首を掴む。

キンジ

「よせ！アリア！」

アリア

「離してキンジ！こいつは私が……私が!!!」

カザリ

「こんな玩具で僕に挑もうなんてね……」

その時、「ピラフ食いてえー」と零斗が戻って来てカザリとアリアとキンジは驚愕する。

零斗は「ピラフうー」と言ってカザリを殴り飛ばす。

カザリはそのまま壁を叩きつけられる。

零斗

「ふう〜やつと探したぜ」

キンジ

「お前今まで何処行つてたんだよ!？」

零斗

「え?ピラフ食いに行つてた」

キンジ

「ピラフを食いに何時間掛かったんだよ!??ってかお前ふざけてるんだろ!？」

零斗

「ふざけてない!」

キンジと零斗のやり取りで呆れるカザリ。

カザリ

「もうバカみたいだよ。さっさと終わらせないと」

女神の涙を取ろうとする。

零斗

「待て！カザリ、そいつは偽物だ！」

ガラスケースの中にある女神の涙が偽物と聞いてカザリは零斗の方へ向く。

カザリ

「それが偽物？どういう事？」

零斗

「そいつには爆弾が入ってるんだぜ？外した瞬間、ドゴンだぜ？」

しかしキンジの内心では、不安を抱いていた。

キンジ

（こんな事、信じるわけがない、ハツタリがバレるだけだ）

カザリ

「あ、そう。じゃあ本物を出してよ」

キンジ

「あっさり信じちゃったよこのグリード！少しは疑えよ！」

カザリがあっさり信じてしまった事にツッコむキンジ。

零斗

「本物は・
・
・
・
・
・
」

懷から女神の涙？を出す。

カザリ

「これが本物の女神の涙かい？」

零斗

「ああ、その通りだ。渡す前に……」

零斗はアリアに向き、手刀で打つような構えをする。

アリア

「な、何よ」

零斗

「悪いが少し眠ってくれ」

そして強烈に首筋にチョップをし、アリアは気絶した。

キング

「アリアあ————！！！！！！！！！！」

零斗

「邪魔する奴はいなくなった。渡してやるから受け止めな！」

零斗は女神の涙？を投げ、カザリは素早く女神の涙？を取る。

しかし、握ると柔らかかった。

カザリ

「あれ？女神の涙ってこんなに柔らかかったっけ？」

零斗

「柔らかいだろう？それをどう使うのか、分かるだろう？」

カザリは想像すると、顔を赤くし、「なんて卑猥な宝石なんだ！」と地面に叩きつける。

キンジ

（それ、宝石じゃないよ……）

カザリ

「こんな卑猥な物がテル様が使いたがってたとは……これはテル様にちゃんと言っておくべき！」

零斗はにやけ、女神の涙？は光り出し、爆発する。

カザリ

「ああーーーーーれえーーーーー」

爆発により、カザリは空まで吹き飛ばされた。

これを見たキンジは大汗を流す。

零斗

「……さあ帰ろう」

何か終わったように言う零斗にずっとこけるキンジであった。

その後、カザリがテルのお仕置きを喰らってウヴァに笑われているのは、言つまでも無い。

どんなお仕置きかはご想像にお任せします。

四話！ 守れ！貴重な宝石！合言葉は…ぽよぽん固くなくい（後書き）

零斗

「やれやれ、今回は大変だつてぜ」

ソウスケ

「零斗く〜ん」

後ろを振り向くと、石田三成のコスプレをしたソウスケがいた。

ソウスケ

「おのれ家康う——————！！！！！！」

零斗

「……………」

ソウスケ

「どう？似てるでしょ？」

零斗

「ああ、似てるぜ」

ソウスケ

「ホントに？じゃあcharleyさんの三成にサインもらいに行こうかな」

零斗

「へえ〜じゃあ行つて来い」

ソウスケ

「分かったよ」

そう言ってソウスケは行った。

零斗

「次回、ウヴァにお見合いが！？そして相手はデュランダルで太ピ
ンチだ」

五話！ ウヴァにお見合い！？寒い女にご注意を（笑）（前書き）

零斗

「作者あゝ今年放送されるアニメの『ツインエンジェル』とスーパー戦隊の『ジェットマン』のクロス小説を書くことに悩んでるんだって？」

龍の骨

「うゝんそうだけど、オリ主は大体出来てるけど、ジェットマンがトレンディだし、ツインエンジェルは怪盗モノだしなゝ」

零斗

「難しいだろうな、いつそジェットマンのようにトレンディにしたら？」

龍の骨

「いやいやいやいや、トレンディにしたら、怪盗モノじゃなくなるしゝ」

零斗

「てか本編に関係無い悩みを持ち込むなよゝじゃあ本編開始！」

五話！ ウヴァにお見合い！？寒い女にご注意を（笑）

イタリア、グラン・サッソに建ててある黒い教会では：

テル

「さて、あの零斗達によって僕の邪魔をされた。よって戦力を上げる」

教会の食堂で、テルは幹部達と話し合っている。

グラン・サッソに建ててある黒い教会は、暗黒流星団のアジトである。

テル

「戦力を上げるにはまず、優秀な人物を君達の部下にする」

ウヴァ

「だが、俺の部下であるカザリは失敗し、牢屋に閉じ込められている」

テル

「当然だ。失敗したものは暫くの一ヶ月、牢屋だ」

ウヴァ

「テル様にしちゃ、優しいな」

テル

「勘違いするな、優秀な部下を切り捨てたら、戦力は減るし、無駄になるからだ」

そしてテルは、紅茶を飲む。

テル

「そこでだ、カザリの代わりの部下を紹介しよう」

ウヴァ

「どんな奴だ？」

テル

「ただし、君の部下として、君の妻として迎え入れるのならば、紹介しよう」

ウヴァ

「ああ、分かった…えっ？妻？」

自分の妻と聞いて目を細くする。

テル

「ならいい、入れ！」

扉が開き、ウヴァ達はそこに向ける。

出てきたのは、銀髪の三つ編みにしつむじの辺りで結ったストレートロングヘアの髪型で、サファイア色の瞳をした美少女である。

ウヴァ

「ほおーう、これがカザリの代わりの部下か」

テル

「その通りだ、だが彼女には気を付ける」

テルの警告を無視して少女に近づくウヴァ。

ウヴァ

「お前、名は？」

少女

「ジャンヌ・ダルク三十世だ」

ウヴァ

「ジャンヌ・ダルクか」

そしてウヴァは壁を叩く。

ウヴァ

「俺の部下になる以上、覚悟しておけ」

少女、ジャンヌ・ダルクが息を吹き掛けると、ウヴァの手が氷る。

ウヴァ

「え？」

ウヴァは自分の手を見ると、青ざめる。

テル

「だから言っただじゃないか。ジャンヌは氷を操る能力を持っている。息を対象物に吹き掛けただけで氷るのさ。それに知略と情報収集が得意だそうだ」

ウヴァ

「え！？そうだったの！？」

更に大汗を流すウヴァであった。

テル

「それと、僕はジャンヌの両親とは仲が良かったし」

ウヴァ

「そ、それは一体……」

テル

「うん、お見合いだ」

ウヴァ

「そ、それは……」

テル

「では、僕とウヴァとジャンヌ以外は、部屋に出るように」

京子

「お見合いですって？あゝら良いわねえ」

セス

「君の幸せを祝ってあげますよ」

義仙

「ウヴァさん、お幸せに」

ウヴァに冷ややかな目で見ながら出ていく京子達であった。

テルとウヴァとジャンヌは座るが、ウヴァは青ざめながら汗を流している。

そんなウヴァをテルは向く見る。

テル

「どうしたんだい？」

ウヴァ

「いや、何でもない」

ジャンヌ

「それより、お前達暗黒流星団は、何をしてるんだ？」

テル

「ああ、僕達暗黒流星団は……」

暗黒流星団は、世界を闇に包む負の力を手に入れる為に真拳使いを狩ってる事をジャンヌに説明をするテル。

ジャンヌ

「ほお、これが暗黒流星団がやっている事か。世界を闇に包んで何をする？」

テル

「それは言えない」

ウヴァ

「あのお、失礼ですが、ジャンヌ・ダルクは十七歳で火刑で死にま

したよね？」

汗を流しながらジャンヌに問うウヴァ。

ジャンヌ

「残念ながら、あれは影武者だ」

ウヴァ

「そ、そうですか、ははははは」

これを聞いてウヴァは苦笑いをする。

テル

「それで、君は聖剣デュランダルを使うんだよね？」

ジャンヌ

「今は無いが、戦闘時には使う」

そしてジャンヌはウヴァを睨む。

ウヴァ

「ひい！」

ジャンヌ

「ウヴァ、貴様は私に覚悟しろって言ったようだな」

ウヴァ

「は、はい。確かに」

ジャンヌ

「貴様も覚悟しろよ、何せ、私の妻であり……私のウヴァ様なんだからあゝ」

ウヴァ

「え！？」

ジャンヌのクールなキャラが壊れるようにキャラ崩壊に驚くウヴァ。

ジャンヌ

「だってだってえゝウヴァ様がすごくカッコ良くてゝ」

ウヴァ

「おい！お前のクールなキャラはどうしたんだ！」

ジャンヌ

「ウヴァ様の妻になれるなんて、私幸せえゝ」

ジャンヌが更に悪化していく事に引くウヴァであった。

ウヴァ

「なあテル様、ジャンヌがキャラ崩壊してるけど……………」

テル

「大丈夫だ、問題ない」

と言いつつテルは『DOG DAYS』のレオンミシエリ・ガレット・デ・ロアのコスプレをしていた。

ウヴァ

「テル様あ……………幾ら同じ声でもそれは不味いぞあ……………」

「……………」

テル

「だから問題無いって言ってるだろう」

ウヴァ

「大有りだ!」

テル

「彼女は君に合うと思うよ」

ウヴァ

「ジャンヌは氷を操るんだろ!?俺は寒いのだめなんだよ!」

そう、ウヴァは昆虫系グリードである為、寒いのが苦手である。

ジャンヌ

「でも、私はウヴァ様のクワガタの顎の角とカマキリの鎌と複眼と外骨格や節足敵な突起に覆われたボディに惚れたから」

ウヴァ

「俺は寒いのはダメなんだ!ダメなんだよお……………」

ウヴァは逃げ出し、ジャンヌは追いかける。

ジャンヌ

「待ってくださいウヴァ様」

ウヴァとジャンヌは部屋から出て、テルは取り残されたのであった。

テル

「早速仲良くなっ たな」

のんびりしながら紅茶を飲んだ。

一方ウヴァは外から出て舞空術を使つて飛んだ。

ウヴァ

（ふう〜これで流石のジャンヌも使えないだろう）

安心してつつ後ろを振り向くが、青ざめる。

ジャンヌ

「ウヴァ様〜私はどこまでもウヴァ様についていきます」

聖剣デュランダルを持ったジャンヌがウヴァと同じ舞空術を使って追いかけている。

ウヴァ

「何でえーーーーー!!!!!!」

何かに逃げるようにスピードを上げて逃げて行き、それを追いかけるようにスピードを上げるジャンヌだった。

東京新宿では……

零斗

「まったくまた警備かよ」

キンジ

「当然だろう、昨日暴れたんだから警備するだろう」

白雪

「キンちゃんの言う通りだよ」

キンジの隣にいるのは、星伽白雪である。

零斗

「そっぴや何で白雪なんだ？」

キンジ

「ああ、昨日風邪をこじらしてしまって休んでる」

零斗

「んだよつまんねえ」

キンジ

「仕方無いだろ？」

その時、「うわぁーーーーー」と叫ぶ声がし、零斗達は警戒する。

ウヴァが自動ドアをぶち破って来た。

ウヴァ

「助けてくれ！助けてくれ！助けてくれえーーーー！！！！！！」

ジャンヌに恐れているウヴァは助けを求めるように叫びながら暴れ、零斗は「落ち着けえーーーーー」と殴り飛ばした。

涙目になっているウヴァに近付いた。

零斗

「どうしたウヴァ、まさか女神の涙を盗まないとクビにされるってやつか？」

ウヴァ

「違うんだ！この際誰でも良い、俺を助けてくれ！緊急事態なんだ！」

零斗

「はあ？その理由がわからねえよ」

ウヴァ

「だから！緊急じた……」

ジャンヌ

「ウヴァ様」

ジャンヌの音がするとウヴァは振り向き、ジャンヌはデュランダルを構えていた。

ウヴァ

「ギアアアアアアアアア！！！！！！」

ウヴァは走り出して窓を突き破って出た。

ジャンヌは「待ってくださいウヴァ様」と突き破った窓から出て追いかける。

これを見た零斗達はすぐ気付いた。

零斗 キンジ 白雪

（）（ああ、そういう事か）（）

ウヴァは街中を逃げ回っており、ジャンヌは追いかけている。

ウヴァ

（どうすりゃ良いんだ！？どうすりゃ良いんだ！？）

後ろを振り向くと、ジャンヌとの距離はだんだん縮めていつていた。

ウヴァ

（このままでは、俺は氷漬けにされる！そうか、人間態になれば・
・でもまずはジャンヌをまかなければ・・・）

目の前には、ライオンがいた。

ウヴァ

「丁度いい、その野郎！」

ライオンはウヴァの声に向くと、驚愕する。

ライオン

「何なんだ君は！？」

ウヴァ

「俺を追いかけている女の相手をしてやれ！」

ウヴァはそのまま逃げていった。

ライアン

「女を相手に？」

ジャンヌ

「ウヴァ様」

ライアン

「そういう事が」

そこにジャンヌの前にライアンが立ちふさがる。

ライアン

「君の相手は僕だ、さあかかって来い！」

ジャンヌ

「邪魔よあんた！」

そしてジャンヌはデュランダルでライアンを吹き飛ばし、ウヴァを追いかけた。

その頃、ウヴァはどうしてるかというと……

ウヴァ

（ふう〜これでジャンヌも諦めるだろう。さて、ゆっくりするか）

人間態になっており、喫茶店でくつろいでいた。

その時、「ウヴァ様」とジャンヌが入り、ウヴァはビクとする。

ジャンヌ

「ウヴァ様〜？ウヴァ様はどこにいますか〜」

ウヴァ

（今の俺は人間だ！気付かれないぜ！）

ジャンヌはウヴァを探し、ウヴァは大量の汗を流している。

そしてジャンヌは諦めたのか、その場を去ろうとする。

ウヴァ

（これであの氷女と結婚せずに済む）

ジャンヌ

「ウヴァ様〜」

ジャンヌの声が聞えると、恐る恐る隣を見る。

ジャンヌ

「見つけましたよ〜？」

ウヴァ

「お前何で分かった！」

ジャンヌ

「ウヴァ様ある所ジャンヌ有りですよ〜」

ウヴァ

「理由になってねえ！ってかどうして変わってるんだ！クールな性格はどうした！？」

ジャンヌ

「・・・そんなの決まってるじゃない、好きな人がいるから変わるんだよ!」

ウヴァ

「おい声優ネタ使うな!それに変わりすぎだろ!ゴム鉄砲をハンドガンに変えたようなものじゃねえか!」

そしてジャンヌは怪しい表情に変わり、ウヴァは汗を流す。

ジャンヌ

「うふふふ、さあウヴァ様、私の想いを受け止めてください」

ウヴァ

「ギアアアアアアアア!!!!!!!」

ウヴァの叫びと共に食べられた(性的な意味で)。

翌日、複眼と胸部以外は白に変わって幹部たちが驚いたのは、言うまでも無い。

五話！ ウヴァにお見合い！？寒い女にご注意を（笑）（後書き）

零斗

「ここでお知らせだ！出してほしいアニメ、ゲーム、マンガ、特撮、ラノベを募集するそうだ」

ソウスケ

「出してほしい作品がある場合、感想に書いてください」

零斗

「但し、作者が知っている作品しか出さないからご了承してください」

ソウスケ

「次回！LBXでミソラ二中の不良達とバトル！更に峰理子が乱入！？『六話！ジャングル！待った無しのガチンコバトル！りっこにしてみよう！』お楽しみに！」

六話！ ジャングル！待った無しのガチンコバトル！りっこりにしてやんよ

龍の骨

「今月はダンボール戦機が発売した〜!!!!!!」

零斗

「つーか発売日に投稿するもんだろ？」

龍の骨

「はい、本来ならそうしたいのですが、スランプがあったりしまし
て……」

零斗

「言い訳は良い、さっさと始めるぞ」

六話！ ジャンゲル！待った無しのガチンコバトル！りっりりりしてやんよ

B S A A 学園の三年 A 組では……

零斗は『週間 L B X』を読んでいた。

フランケン

「零斗、何読んでるんだ？」

零斗

「ん？週間 L B X だけど」

フランケン

「L B X って……確か危険性があつたため一時発売中止になつて、強化ダンボールのお陰で子供達に人気になったんだよね」

零斗

「その通り。その L B X の研究をしているんだ」

フランケン

「研究って……どんな？」

零斗

「いやあゝ人間の魂を L B X に移してバトルし、負けたらあの世行きという……」

フランケン

「それ危険じゃねえか！っていうかそれ殺し合いしかないから！やったら今度こそ発売中止になる！」

零斗

「甘いフランケン、命を懸けてこそがLBXバトルなんだ。LBXの気持ちになって戦う、良い事じゃねえか」

フランケン

「それ絶対トラウマ産むから！LBXの人气が落ちる！」

零斗のともない考えにツッコむフランケンであった。

するとキンジとアリアがやって来た。

キンジ

「零斗、お前またLBXの雑誌読んでんな」

アリア

「どっただけ好きなのよ」

零斗

「いやあ〜これ見てたら欲しくなっちゃってさ〜特に俺が欲しいLBXは・・・」

そして零斗はキンジ達に週間LBXを見せた。

零斗

「ブルドなんだよね〜改じゃないやつ」

キンジ

「確かにブルドは地形走破能力に優れてるが、スピードに劣るぞ？」

零斗

「それが良いんだよ。それに重機とかそういうの好きだし」

これを聞いてフランケンとアリアとキンジは呆れる。

零斗

「今日俺のブルドが届くんだよねー早く家に帰ろう」

キンジ

「おい、次授業だぞ？」

零斗

「わーったよ。じゃあ放課後って事で」

チャイムが鳴ると、フランケン達は席についた。

教室の前の扉が開き、雪蓮とジョッシュが入ってくる。

雪蓮

「はぁーい、ホームルームの時間だよ。今日は私について教えてあげちゃうよー！」

ジョッシュ

「質問がある人は手を挙げてねー」

テンションが上がrippなしの雪蓮に引き気味の生徒達（零斗を除いて）だった。

雪蓮

「質問ある人はいるかなー」

すると零斗が手を挙げ、立った。

零斗

「雪蓮先生の好きなLBXは何ですか？」

生徒達

「『それ関係ないだろ！』『』『』」

零斗の質問に一齐にツッコむ生徒達。

雪蓮

「好きなLBXねえ、私はクノイチかな」

零斗

「クノイチですか」

生徒達

「（（（うわぁ、答えちゃったよこの教師）））」

その後、零斗の質問が終わった後、生徒達は雪蓮に質問をしたという。

放課後……

零斗はクラウザーの居酒屋もとい、自宅まで走っていた。

零斗

「おっちゃん！荷物届いてるか！？」

零斗は扉を開き、クラウザーに荷物を届いたかを問う。

クラウザー

「ああ、届いてるぜ。これだろ？」

クラウザーはテーブルに置いてあるダンボール箱を零斗に渡した。

零斗

「いやあゝ欲しかったんだよねゝこれが」

クラウザー

「そうかゝ」

零斗は自分の部屋へ行き、ダンボール箱を開けた。

中に入ってたのは緑色のブルドとブルドアックスとCCMだった。

CCMとは、LBXをコントロールをする携帯端末であり、画面にLBXの状態を表示し、携帯電話としても使える。

零斗

「では早速動かしてみよう」

CCMを起動させ、LBXの設定をした後、ブルドを動かした。

ブルドは置いてあったブルドアックスを拾い、振った。

零斗

「いやあゝ良いねえゝ」

ブルドを動かして楽しそうな零斗であった。

こうして私服に着替え（マイティコートは着たまま）、街を歩いた。

その時、携帯が鳴り、零斗は取り出してかけた。

零斗

「何だ？」

キンジ

『零斗、大変なんだ！』

キンジからの電話だった。

零斗

「何だ？」

キンジ

『ミソラ二中の四天王の三人が、LBXの破壊活動をしている！しかもLBXで！』

零斗

「マジで？そりゃ大変だ」

キンジ

『他人事みたいに言うなよ！早く河川敷に来てくれ！』

零斗

「はいはい、いつも俺が修行している河川敷ですね、分かりました。すぐ急行します」

そして電話を切り、河川敷に向けて走って行った。

河川敷にて……

アリア

「ぐっ、なんてLBXなの!？」

????

「もうこれまでかい？」

????2

「余裕でこわす!」

????3

「へへへへ、『双剣双銃』も大した事ないな」

アリアはジャンゲルのジオラマで自分のLBX、クノイチで戦っているが、ホバー型のLBXクインと水陸両用型LBXナズーとカメレオン型LBXマッドドッグに苦戦していた。

そのLBXを操作しているのは、赤い学ランに小柄な少女、矢沢リコと大柄の男、亀山テツオと、顔色が悪くゾンビのような風貌をした男、鹿野ギンジだった。

アリア

「零斗はまだなの!？」

ギンジ

「いや、電話したから来ると思う」

一方、クノイチは二つの銃でナズーに撃つが、かわされ、クイーン
のハンドガンを喰らう。

アリアのCCMに表示されているクノイチの体力は、半分だった。

アリア

（不味いわね、半分の体力で三体の攻撃をともに喰らったら、私のLBXは確実に終わるわね）

テツオ

「これで終わりでこわす！」

ナズーは襲い掛かろうとし、クノイチは防御体勢をとった。

その時、緑色のブルドが現れ、ナズーはブルドアックスで吹き飛ば
されてしまう。

アリア

「これって……まさか！」

アリアが後ろを振り向くと、CCMを持った零斗がいた。

零斗

「待たせてしまったな。さあ、ここからが盛り上がる所だ！Let
！Party！」

零斗は叫び、ブルドを動かす。

ブルドはナズーをブルドアックスで攻め、テツオは少し慌てる。

零斗

「オラオラオラオー！！！！！！」

テツオ

「うわわわ……」

リコ

「くっ！ブルドなのに何で押されてるんだ！？まさかお前、相当な実力を……」

零斗

「違うな、今日が初めてなんだ！」

零斗の発言により、周りの空気は冷めた。

リコ

「は、初めてえーーーー！！！！！！！！？」

ギンジ

「初めてなのにこんな操作出来んのか！？」

テツオ

「そうには見えないでござす！」

初めてな零斗に驚く四天王の三人組、勿論アリアとキンジも驚いている。

アリア

「あんた初めてって……」

ロケットランチャーの弾を放ち、ナズーは直撃し、爆発した。

テツオ

「そ、そんな……」

零斗

「初めてなのに勝っちゃうなんて……いや……予想外だったよあ」

アリア

（よ、予想外じゃないでしょ……）

内心では呆れているアリアであった。

クイーンはハンドガンでブルドに攻撃する。

零斗

「おい、不意打ちなんて反則だぞ」

リコ

「うるさいこのハジケリスト！そのハジケたLBXをぶっ壊してやる！」

リコはブルドに対して怒りを露にしえいる。

零斗

「はあ……しょうがないなあ」

アリア

「にゃ……！！！！！！！！」

零斗

「ん？」

アリアのクノイチがマッドドッグに追い詰められていた。

ギンジ

「お前のLBXはこれまでだな」

零斗

「アリアあーーーーー！！！！これを使って反撃しろーーーーー！！！！」

そしてブルドは、ブルドアックスをクノイチに投げるが、受け止められず、ぶつかって倒れてしまう。

体力は少しだけ減ったが、ブルドアックスの重さで起き上がれなくなっている。

アリア

「何すんのよ！」

零斗

「えへへやっちゃった」

アリア

「やっちゃったじゃないわよ！」

これを見たりコとギンジは呆れる。

ギンジ

「うわぁ〜グダグダじゃねえか」

キンジも呆れていた。

しかしブルドはロケットランチャーでクイーンに攻撃し、リコはこれを見た瞬間慌てる。

ブルドはブルドアックスを拾い、クイーンに強烈な一撃を与える。

同時にクイーンは動かなくなった。

リコ

「そんな……この小説……不条理なのか……？」

そして白目になって倒れた。

キンジ

「チッ！くたばったか」

マッドドッグは姿を消し、ブルドとクノイチは探すように動く。

その時、黒いLBXが現れ、マッドドッグの腹を右手の爪で貫いた。

零斗

「何だ!?!」

キンジ

「い、この爪のインビットってまさか……」

キンジは振り向くと、CCMを持った金髪でフリフリの改造制服を

着た少女の姿がいた。

アリア

「あんた・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

???

「理子は暗黒流星団の影星隊の隊長、峰理子」

零斗

「ほおーっ、確かこのLBX、自律型LBXじゃなかったっけ？」

理子

「ふふふ、理子はね、このLBXをコントロールを出来るように改造したんだよ？」

アリア

「改造ってあんた・・・・・・・・」

零斗

「その改造したLBX、強いのかどうか、見てみたいぜ」

理子

「良いよ、見せてあげる」

インビットは素早く走り、クノイチは銃で攻撃するが、かわされ、爪で腹を貫かれてしまう。

アリア

「そんな・・・・・・・・私のクノイチが・・・・・・・・」

ショックのあまり、アリアは膝をつく。

零斗

「この光景を見ると、シャ専用ズックがジの腹を爪で貫いたシーンを思い出すぜ」

理子

「へえ、そうなんだ」

ブルドは白いオーラを湧き出し、インビットは紫のオーラを湧き出した。

七話！ クラス学級員長をかけたLBXバトル開始！まだ序章だよん（前書き）
前回の反省をふまえて、零斗のクラスのキャラを出しました。

零斗

「ホント前はダンボール戦機を知らない人がいたら置いてきぼりにされる内容だったよな」

今回は烈火竜さんが考えてくれた戦闘員が登場します。

ダンボール戦機を知らない人は注意してください。

七話！ クラス学級員長をかけたL B Xバトル開始！まだ序章だよーん

【アフリカ キジュジュ】

村人1

「うわぁー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

村人2

「やめてくれえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

火炎放射器を持った戦闘員と手榴弾を投げる戦闘員達が村人を殺していた。

その戦闘員の名は炎星、火炎放射器で証拠隠滅や敵を抹殺する戦闘員である。

時には手榴弾を使う。

???

「ヒヤーツハハハハハハハ！燃やせ！もつと燃やせ！灰になるまで燃やせえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

炎星を率いる金髪のモヒカンの男は村人が燃える光景を楽しんでいる。

モヒカンの男

「良いパーティだぜえー！ー！ー！ー！ー！ー！最高だ！」

するとポケットから携帯の着信音が鳴り、モヒカンの男は取り出す。

モヒカンの男

「はい、副隊長のHELLです……了解しました」

モヒカンの男、HELLは携帯をしまい、炎星に向く。

HELL

「お前等よく聞け！アンク隊長の命令だ！この村に設置してある爆弾で吹っ飛ばせ！」

HELLは怪しい笑みを浮かべる。

HELL

「そしてこの村を灰にしたら、アंक隊長とパーティだあ——」

炎星達

「おおー！！！！！！！」

こうしてキシュジュの村は、設置された爆弾によって、炎に包まれた。

これを見た少年は、膝を落として涙を流す。

少年

「そんな、僕の帰る場所が……」

【新宿の路地】

理子のインビットと零斗のブルドが互いにオーラを出し合っていた。

そしてブルドはブルドアックスを構え、インビットは爪を前に出し、構える。

理子

「理子のインビットには、肩についてあるパーツ、無いでしょ？」

零斗

「ん？確かに無いな」

理子

「これはね、理子が操縦出来るように外したの」

零斗

「へえー考えたねー。じゃあその力、見せてもらおうか！」

理子

「かかって来なよー」

ブルドはロケットランチャーのロケットを放ち、インビットはそれかわす。

インビットは爪で攻撃し、ブルドはブルドアックスで防ぎ、打ち合う。

零斗

「中々やるじゃねえか」

理子

「そつちもね。でも理子の本気はこんなじゃないよ！」

『アタックファンクション 地獄乱舞』

理子のCCMの画面に必殺ファンクションが表示され、インビットはブルドを高く打ち上げ、空中で乱打し、最後の一撃で地面に叩きつけた。

ブルドはその衝撃でバラバラになってしまふ。

零斗

「あーあ、ブ레이크オーバーしちゃったな」

理子

「あはは、理子の勝ちだよ」

そしてバラバラになったブルドを拾い、懐に入れた。

零斗

「やれやれ、俺のLBXじゃダメだったか、じゃ帰るわ」

零斗はその場で立ち去った。

キンジ

「お、おい」

後からキンジは零斗を追いかける。

理子

「さて、それじゃあ理子も帰ろつと」

そして理子も帰った。

アリアは……………

アリア

「クノイチがやられた……………」

クノイチが壊されたショックで動けなくなっている。

因みにリコ達も帰っていった。

【零斗の部屋】

零斗

「はあ、つたくお気に入りだったのによ。壊されちゃったぜ」

零斗は壊れたブルドを見て呟いている。

すると隣に白い箱があった。

零斗はそれを拾い、ついてある紙をとった。

その紙には、こう書かれていた。

『このLBXは零斗君の力になるよbソウスケ』

零斗

「LBXねえ」

箱を開けると、アーマーフレームとコアスケルトンだった。

零斗

「何だこれ？このアーマーフレームをコアスケルトンに付けろって訳か」

これを見て理解した後、零斗は早速アーマーフレームをニッパで取り、コアスケルトンにつけた。

零斗

「で、出来た……」

目の前には、『遊戯王ZEXAL』の希望王ホープに似たLBXだった。

零斗

「こいつの名はホープ……だったっけ？早速動かしてみるか」

そしてCCMを取り出し、ホープは動く。

零斗

「おおーカッコいいなあー」

更に双剣を取り出し、剣を振るう。

零斗

「すげえなあーそうだ、ブルドをソウスケに直してもらおう。確か模型店の息子だったな」

そして零斗は部屋の明かりを消し、布団を敷いて寝た。

翌日

零斗は居酒屋から出て走って登校する。

その途中、皇牙に会う。

零斗

「皇牙」

皇牙

「零斗か？」

零斗

「そうだが、昨日良い事あったんだよ」

皇牙

「良い事？」

皇牙は首を傾げ、零斗は学生バッグからホープを取り出す。

皇牙

「零斗、それLBXか！？」

零斗

「そう、帰宅した時、白い箱があったんだ。その箱を開けると、なんとこいつのアーマーフレームとコアスケルトンのセットが入ってたんだよ。しかもこのLBXの名はホープだ！」

皇牙

「へえ」

興味津々にホープを見る皇牙。

皇牙

「実は、俺もなんだ」

皇牙は学生バッグからLBXを取り出す。

そのLBXは、『コンパチブルカイザー』にそっくりだが、胸の宝石らしき物の中にアルファベットの『K』と書かれていた。

皇牙

「昨日、帰宅してすぐに飲み物を取りに行こうと冷蔵庫に向かおうとすると、変なアタッシュケースがあっただ。そいつを開けてみるとCCMとこのLBXが入ってたんだ」

零斗

「こりゃ凄いな。こいつの名は？」

皇牙

「カイザーディアン、このLBXに『オーバーゲートOGエンジン』がある」

これを聞いた零斗は、首を傾げる。

零斗

「何だそりゃ？」

皇牙

「俺にもわからねえ、とにかくそいつについてソウスケに聞いてみるか」

零斗

「そつだな、それよりもさ、LBXを肩に乗せて登校しようぜ」

皇牙

「ああやるうぜ」

零斗と皇牙は、自分のLBXを肩に乗せて歩いた。

【BSAA学園 三年A組】

フランケン

「そうか、零斗のLBX、壊されちゃったんだ」

キンジ

「そついうわけなんだ。それとアリアのクノイチも壊されてる」

フランケン

「零斗はともかく、アリアは相当落ち込んでるだろうな」

フランケンはキンジに昨日の出来事を聞いて少し顔を下に向く。

すると……………

アリア

「だれが落ち込んでるんですって？」

アリアの声にキンジとフランケンは反応する。

キンジ

「アリア!？」

アリア

「私がそんな事で落ち込むわけが無いでしょ。見なさい、クノイチは直ったわ」

キンジとフランケンがアリアの右肩に乗っているクノイチを見る。

キンジ

(直ったんだ……)

そして『戦国BASARAシリーズ』の石田三成のコスプレをしたソウスケが現れ、キンジ達は驚く。

ソウスケ

「おはようみんな」

フランケン

「ああ、おはようって！何でコスプレしてんの!？」

ソウスケ

「いやあ、僕、『戦国BASARA』のキャラの中で三成が好きでさあ、しかも僕の声って三成と同じ声してるでしょ？」

フランケン

「いや、そう言われても……ってか中の人繋がり!？」

ソウスケ

「まあそう言うかもね」

これを見て少し呆れるフランケンとキンジであった。

零斗

「おはよう皆！」

皇牙

「ちいっす」

フランケン

「ああ、おは……って零斗と皇牙の肩に見たことも無いLBXが乗ってるぞ!？」

零斗の肩にホープ、皇牙の肩にカイザーディアンが乗っている事に驚くフランケン。

フランケン

「零斗、どうしたの!？そのLBX……ブルドはどうした!？」

零斗

「え？ああそうだった、こいつを直してもらったんだ」

フランケン

「いや、そういう問題じゃなくて……」

零斗のボケに冷静にツツコミを入れるフランケンであった。

懐から壊れたブルドを出し、ソウスケに渡す。

ソウスケは壊れたブルドを見る。

零斗

「どうだ？直せそうか？」

ソウスケ

「直せなくはないけど、やってみるよ」

学生バッグからドライバーやペンチ、接着剤を取り出し、自分の席に座り、壊れたブルドを机に置いて修理を始めた。

一夏

「何やってるんだ？ソウスケは」

篤

「どうやらLBXを直してるようだな」

ソウスケがブルドを直す様子を見る一夏とソウスケだった。

零斗

「おつ篤と一夏じゃん」

一夏

「零斗、ソウスケはLBXを直しているようだけど……」

零斗

「ああ、あれか？俺のLBXを直してる」

篤

「お前の！？だがお前のLBXは肩に乗ってるのでは！？」

零斗

「ああ、これは二号機だ」

一夏 箒

「「に、二号機!？」」

一夏と箒は、声を合わせて驚いたような言動をとる。

零斗

「昨日壊されちゃってさあゝ、もう直らないなゝと思ってさ、手紙付きの箱を見て思い出した」

一夏

「思い出したんだ……ってか手紙付きの箱ってどんなんだ？」

零斗

「そつだなあゝこいつだ」

肩に乗っているホープに指を指した。

一夏

「これって、見たことないLBXだな」

零斗

「まあね、日頃の良い行いをしてきたから、きっとこのLBXが来たんだなゝ」

一夏

（いや、日頃の良い行いをしているようには見えないような……
・）

零斗の発言により、少し引く一夏であった。

チャイムが鳴り、零斗達は席に着き、前の扉が開いて雪蓮とジヨッシュが入ってきた。

千姫の号令により、ショートホームルームSHRが始まった。

雪蓮

「皆さん、おはようございます。今日の一時間目は数学ですが、ホームルーム予定を変更してHRにします！」

するとなのはが手を挙げる。

なのは

「あの～どうして変更をしてHRなんですか？」

雪蓮

「え～そうですねえ」

雪蓮ビジョン開始

【職員室】

雪蓮は化粧をしており、機嫌を悪くしている冥琳がやって来る。

冥琳は「雪蓮！」と言って机を叩き、雪蓮は驚く。

雪蓮

「な、何!？」

冥琳

「いつまで学級委員長が決まるんだ!？」

雪蓮

「え?何の事?」

冥琳

「他のクラスは学級委員長が決まり、雪蓮のクラスだけ決まっていな
い!」

雪蓮

「ええ!？」

自分の担当のクラスだけ学級委員長が決まっていな
いと聞いて驚く
雪蓮。

冥琳

「二日以内に学級委員長を決めてもらうと理事長が言ってから五日
たっている」

雪蓮

「七日前の日、私は出張でいなかったわよ!何で教えてくれなかつ
たのよ!？」

冥琳

「私はその七日前の日にメールしたぞ!」

雪蓮

「え!?!嘘っ!?!」

慌てて携帯を取り出し、メールを見て青ざめる。

雪蓮

「げっ!？」

冥琳

「あなたが気付かないせいで、私は理事長に大目玉を喰らった」

雪蓮

「ちよつと！それって私のせいだって言うの!？」

冥琳

「あなたが気付いていれば、こんな事にはならないで済んだ!」

雪蓮

「何よゝ!」

雪蓮と冥琳の口喧嘩は、朝のSHRの五分前まで続いたという。

雪蓮ビジョン終了。

雪蓮

「という訳なの!」

これを聞いた生徒達は少し呆れる。

シャロ

「あのゝそれって気付かない先生がいけないんじゃないんですか?」

雪蓮

「うう、でも電話で伝えればクラスの学級委員長は決まるのに！」

零斗

「そつだよなあ〜確かに冥琳先生がいけないよなあ〜」

千姫

「あんた何同情してんのよ!？」

零斗が雪蓮に同情するような発言にツツコミを入れる千姫。

雪蓮

「そつだよなあ〜零斗君分かってるじゃない」

セシリア

「あなたは自分が言ってることが何だか分かってますの!？」

嬉しそうな雪蓮にツツコミを入れるセシリア。

零斗

「お前等雪蓮先生を責めすぎだ、雪蓮先生だってすごく苦労してんだぞ！」

フェイト

「いや別に責めてないよ!？」

レスター

「全然苦労しているような感じには見えなかったよ!？」

零斗にツツコミを入れるフェイトとレスターであった。

ソウスケ

「皆、雪蓮先生を苛めないで……」

涙目になるソウスケの隣には、腕を組んでいる一刀がいた。

一刀

「そつだぞ、雪蓮先生を苛めると許さんからな、雪蓮先生の気持ち
を分かっているのは零斗達と俺だけだからな」

エリオ

「苦勞を知らぬ者、イカロスの名において断罪を下す」

キャラ

「そして私からはクナイ千本だよ」

ネロ

「いやいやお前等全然分かってないだろ！？そしてその二人！物
騒な事を言ったりしようとしたりしないで！」

ソウスケと一刀とエリオとキャラにツツコミを入れるネロ。

零斗

「だあーもつづるせえ……！」

そして零斗が大声で言うと、静まった。

零斗

「こんなグダグダじゃいつまで経っても決められねえじゃねえか！
早く決めたいからLBXバトルで白黒つけようぜ！」

ライアン

「白黒つけるって……」

零斗

「LBXバトルで、立候補者同士で戦い、勝った奴が学級委員長になれるというのはどうだ？」

これを聞いて生徒達はざわめく。

アリス

「LBXバトル!？」

夕化

「しかも、勝ったら委員長になれるって」

ネココ

「もし、零斗が勝ったらにゃーの!？……」

コロナ

「零斗が委員長!？」

そして四人は零斗が学級委員長になる妄想をする。

零斗

『俺が学級委員長になったからには、お前等を引っ張る。よろしくな』

アリス 夕化 ネココ コロナ

『良いかも(にゃーの)』

カーリーナ

「何を妄想しているんですの！？あなた達は！？」

妄想している四人にツッコむカーリーナ。

雪蓮

「良いわね、そのLBXバトルで決めるの。じゃあ採用！」

レスター

「良いのか！？これで！？」

零斗

「じゃあ、参加者をリストアップ！」

紙に書かれていたのは、『零斗VSセシリア たけしVSキンジ
アリアVSアックス ダイチVSカーリーナ タツヤVS一刀 皇牙
VSライアン』である。

零斗

「では、決まったな。それとたけし、どうした？」

暗い表情をしているたけしに声をかける零斗。

たけし

「すみません、俺LBX無くて、CCMならあるんですけど……」

零斗は直ったブルドをたけしに渡す。

たけし

「え？」

零斗

「こいつを持ってけ、きっと力になってくれるはずだ」

貰った時、たけしの表情は明るくなった。

たけし

「ありがとうございます！」

零斗

「では、一回戦を始めるぞ！」

零斗は懷からDキューブを取り出し、ボタンを押して黒板の近くに投げた。

Dキューブは展開し、地中海遺跡のジオラマのステージになった。

零斗

「一回戦目、始めようぜ」

セシリア

「私のLBXは強力ですわよ」

そしてセシリアと零斗は、ジオラマのステージに向かった。

七話！ クラス学級員長をかけたLBXバトル開始！まだ序章だよね（後書き
オリジナルLBXの募集の締め切りは七月一日を過ぎてしまった為、
七月二十三まで募集します。

零斗

「応募条件は前回の話の後書きに書いているからよろしくな！」

それとダンボール戦機を知らない人に深く、お詫び申し上げます。

本当にすみませんでした！

炎星

武器 火炎放射器 手榴弾

火炎放射器で証拠隠滅や敵を抹殺する戦闘員。
時に手榴弾を使う。

八話！ 学級委員長をかけたLBXバトル！負けたら罰ゲームね（前書き）

零斗

「え、今回で、LBX編は終わるぞ」

龍の骨

「皆さんホントに申し訳ありませんでした」 スライディンググ土下

座

八話！ 学級委員長をかけたLBXバトル！負けたら罰ゲームね

零斗とセシリアは、Dキューブの前にいた。

そのDキューブにあるジオラマは、地中海遺跡である。

零斗

「さて、お前のLBXを見せてもらおうか」

セシリア

「良いですわ」

セシリアの肩に乗っているLBXは、LBXアサシンを青くしたような機体だった。

零斗

「へえ、アサシンか」

セシリア

「違いますわ、このLBXは神谷重工で作られたアサシンにブルーティアーズの機能を付け足したLBX『ブルースカイ』ですわ！」

零斗

「ブルーティアーズの機能をねえ、ならば俺のLBXはホープだ、こいつには注意しろよ」

そして零斗とセシリアは、CCMで設定をする。

零斗

「ホープ！」

ホープはジオラマの方へ移り……

セシリア

「ブルースカイ！出撃ですわ！」

ブルースカイはジオラマの方へ移った。

二体のLBXは、互いに武器を構える。

ホープは双剣を持って走り、ブルースカイはスナイパーライフルで撃つ。

ホープはそれをうまくかわし、攻撃する。

攻撃されたブルースカイは、体力が少し下がる。

零斗

「ふふふ、先に攻撃させてもらったぜ」

セシリア

「やりますわね、しかしブルースカイが遠距離攻撃だけのLBXだと思いませんか？」

零斗

「何？」

ブルースカイは武器を斧型の剣、ヘビィソードを取り出す。

その攻撃を防ぐホープは押し返し、攻撃する。

セシリア

「流石はホープですね、ならば本気で行かせてもらいますわ!」

するとブルースカイの背中から四つの青いビットが出てくる。

ビットはレーザーでホープに狙い、ホープはそのレーザーをかわす。

零斗

「これがブルーティアーズの機能が、面白い」

ホープはビットのレーザーをかわしながらブルースカイに近付いていく。

しかし、一発喰らってしまう。

零斗

「チイ、そう簡単には近付けねえってか」

ホープはビットのレーザーをうまくかわす。

零斗

（くそ、あのビットを何とかしねえと……ん？待てよ……）

零斗はセシリアのCCMを見て、何か気付いた。

そしてホープは、ビットのレーザーをかわし、ブルースカイに体当たりをし、ブルースカイに攻撃しようとするが……

セシリア

「掛かりましたわね」

ブルースカイは腰に付いてあるミサイルランチャーを展開させ、ホープに放った。

零斗

「ヤバっ！」

ホープはミサイルを何とかかわすが、一発のミサイルに喰らった。

セシリア

「どうです？私のブルースカイは？」

零斗

「ヤベエなあ……これホントに勝てないかも……………」

その時……………

零斗のCCMに『ダブルバーニングエッジが使用可能になりました』と表示されていた。

零斗

「使用可能か、試してみるか！」

そしてホープはビットのビームとミサイルをかわしながら走り、ブルースカイに近付いた。

零斗

「今だ！必殺ファンクション！」

『アタックフアンクション ダブルバーニングエッジ』

ホープの剣身が赤くなり、ブルースカイを連続で切る。

そして怯んだ所でアッパーをかまし、ブルースカイはブレイクオーバーした。

セシリア

「そんな・・・私が負けるなんて・・・」

負けたセシリアは、少し悲しそうだった。

零斗

「大丈夫だ、あきらめなければ、強くなれる」

セシリア

「あきらめなければ・・・ですの？」

そして零斗はにやけ、懷から緑色のドリンクが入ったビーカーを取り出す。

零斗

「負けた人は罰ゲームとしてえゝこのマイティドリンクを飲んでもらいます！」

セシリア

「ちよつと！？嫌がらせですよ!？」

緑色のドリンクに青ざめながらツッコミを入れるセシリア。

ハルナ

「あのドリンク、どうやって作ったんだ？」

マイティドリンクに疑問を抱くハルナ。

零斗

「このドリンクの材料は、ゴキブリの死骸十匹、ネズミの死骸五匹、腐ったトマト二十個ミキサーしたドリンクなの」

これを聞いた生徒達は、「うわぁーーーー！！！」と言って青ざめながら引く。

鈴音

「あんなの飲んだら死ぬわよ！」

フランケン

「零斗！そのドリンクヤバいって！！」

フランケンと鈴音は、青ざめながら零斗にツッコミを入れる。

零斗

「何言ってるんだよ、うめえよ！健康に良いんだよ！」

篤

「健康に良いどころが、命が危うくなるぞ！」

篤も零斗にツッコミを入れる。

零斗

「あ、でも、飲まなかった場合はあゝ」

するとネココとコロナが、セシリアの腕を掴み、動けなくする。

セシリア

「何なんですよ!?!」

零斗

「強制的に飲ませます!」

フランケン

「ひでえじゃねえかあ—————!!!!!!」

そしてマイティドリンクを持ち、ヤンデレな目になったアリスがセシリアの前に現れる。

アリス

「ふふふふ、零斗のドリンク美味しいよお」

セシリア

「ひい—————勘弁ですわ!勘弁ですわ!」

アリス

「ふふふ、これを飲んで強くなろうねえ」

セシリア

「いやあ—————」

—————!!!!!!」

アリスに無理矢理飲まされ、「うべえうばあ、ぼぼぼぼ!」と気絶

したのは、言うまでも無い。

零斗

「何だよ！こんな所でおねんねか？まだ夜にもなつてねえぞ」

フランケン

「お前のドリンクのせいで倒れちゃっただろうが！」

これを見て候補者は青ざめる。

ダイチ

「あれは流石に……」

キンジ

「つーかあれ、兵器並にヤバくねえか？」

アリア

「あんなの飲んだら死ぬわよ！」

零斗は候補者の意見をスルーし、進めようとする。

零斗

「それでは、次行ってみよう！」

たけしVSキンジ

たけし

「いけえブルド！」

ブルドは、ブルドアックスで攻撃し、ズールはそれを防ぐが、体力

は減っていく。

キンジ

「初めてなのにやるな、だが……！」

ズールは剣を剣を構え、ブルドは突進する。

キンジ

「今だ！必殺フアンクション！」

『アタックフアンクション ソードサイクロン』

そしてズールの地面から竜巻らしき風が出てくる。

たけし

「え！？」

ズールは回転して竜巻を起こし、近付いたブルドは竜巻の餌食となり、吹っ飛び、戦闘不能となった。

零斗

「勝者！遠山キンジーーーー！！！！！！！！」

たけし

「負けちゃったか……」

負けたたけしは、少し暗い表情になる。

キンジ

「大丈夫だ、お前も強くなれる」

たけし

「キンジ・・・・・・・・」

零斗

「それでは！たけし君罰ゲーム決定です！」

そしてマイティドリンクを渡されたたけしは、それを一気飲みをする。

セシリアのようになってなく、気絶しなかった。

これを見て青ざめながら千姫は尋ねる。

千姫

「あんだ、大丈夫なの？」

たけし

「大丈夫だ、問題・・・・ない」

答えた後、その場で倒れてしまった。

ダイチ

「たけしいーーーー！！！！！！」

タツヤ

「うおおーーーー！！！！！！」

ダイチは倒れているたけしに駆けつけ、タツヤは涙を流す。

メイメイ

「たけし！しっかりするね！」

メイメイはたけしが倒れている事に気付き、すぐ駆けつけていた。

するとたけしは……

たけし

「皆ごめん、俺の分まで戦ってくれ、そしてメイメイ、俺はもう先に寝るから……」

メイメイに言い残しながら、目を閉じた。

メイメイ

「たけしいーーーーー死んじゃ嫌ね！死んじゃ嫌ね！」

涙を流すメイメイであった。

その後、セシリアとたけしは、保健室に運ばれたという。

零斗

「さあ次行こう！」

アリアVSアックス

アリアのクノイチは、アックスのオルテガにコダチで攻撃をするが、かわされる。

クノイチはオートマチックガンに切り替え、オルテガに撃ち、オルテガはギガントアックスを回して弾く。

アリア

「やるわね、あんた」

アックス

「LBXをやって二十日なんだ」

クノイチはコダチに切り替え、オルテガと打ち合う。

アックス

「すごいね、アリアさん、でも僕の本気はこんなもんじゃないよ！」

『アタックフアンクション ジェットハンマー』

ギガントアックスに付いているジェットエンジンを利用し、振り上げてクノイチに叩き切ろうとするが、かわされてしまう。

アリア

「悪いけど、脇が甘いわよ！」

『アタックフアンクション ツムジカゼ 旋風』

クノイチはコダチでオルテガを素早く攻撃し、最後はアッパーで吹き飛ばし、オルテガはうまく着地する。

だが、オルテガの体力は、あとわずかだった。

アックス

「脇が甘い？残念だけど甘いのは君だよ」

オルテガは素早くクノイチへ向かい、打ち上げてジェットハンマーで叩き落とした。

地面を叩きつけられたクノイチは、戦闘不能となった。

アリア

「う、嘘でしょ……」

アックス

「惜しかったね」

零斗

「勝者ぁーアックスこと、アレックス・ウェスカー!!!!」

そしてアリアは、アリスからマイティドリンクを渡されるが、青ざめて見ていた。

アリア

「うわぁ、これを飲むのね……」

アリアは覚悟してマイティドリンクを飲んだ……が「ゴファー————!!!!」と倒れた。

フランケン

「……な、何か、あのドリンクを見たらすつごく逃げたくなるような感じがする……」

とフランケンは青ざめながら呟く。

ダイチVSカリナ

ダイチ

「うわぁーーーー！！！！！！サラマンダーがあーーーー！！！！！！」

カリーナ

「私のアマゾネスを倒そうだなんて、百年早いすわ！」

ダイチの油断の所為か、または始めたばかりの所為か、カリーナのアマゾネスがダイチのサラマンダーをあっさりと戦闘不能にさせた。

これを見てダイチは啞然とする。

零斗

「勝者！カリーナ・ベルリッティ！！！」

そしてダイチは逃げようとするが、零斗に捕まった。

ダイチ

「やめるんだ零斗さん！こんな事をしたら、どうなるか……」

零斗

「お前は負けたんだ、素直に受け入れろ、でないと……」

ダイチの目の前には、黒い笑みをし、マイティドリンクを持ったエリーがいた。

エリー

「ふふふ〜ダイチくん、このドリンク栄養に良いですよ〜」

そして一刀は、マイティドリンクを取って飲んだ。

全部飲み干し、平然としている事に全員驚く。

キンジ

「嘘だろ！？あんな不味いドリンク飲んで平然としてられるなんて！？」

セラフイム

「あんなクソ不味いドリンク飲んで平然としてられるなんて、バカでしょうか？」

キンジは驚愕し、セラフイムは毒の混じった眩きをした。

そしてユーは『あれは飲みたくない』と書いてあるメモ帳を表に出す。

一刀

「零斗、言っただろ？このドリンクは苦味を抑えとけて」

零斗

「ごめんごめん、ゴキブリの量多すぎた」

一刀

「今度から気をつけろよ」

零斗

「ああ分かったよ」

そう言つて零斗はマイティドリンクを飲み、これを見たフランケン達は一刀と零斗を恐ろしい物を見たような目で見える。

フランケン

(ある意味すつごくヤバい………)

皇牙VSライアン

ライアンのグラディエーターと皇牙のカイザーディアンが対峙している。

皇牙

「このLBXはかなりヤバいぞ」

ライアン

「どれくらいヤバいのか、ためさせてもらつよ！」

グラディエーターはグラディウスでカイザーディアンに攻撃し、蹴りを入れる。

カイザーディアンは攻撃してくるグラディウスを掴み、グラディウスごと投げる。

そして両手を飛ばす『カイザーナツコ』でグラディウスにダメージを与え、胸の『K』というアルファベットから宝石らしき物を飛ばす『カイザーバスター』をかます。

グラディウスの体力は、あとわずかになってしまった。

ライアン

「くっ、確かに不味いな」

皇牙

「だから言ったる？」

カイザーディアンは目の部分から放つ『メーザーアイ』でグラディウスに攻撃するが、かわされる。

ライアン

「皇牙、このLBXにはとっておきがあるんだ」

皇牙

「え？」

ライアン

「喰らえ！必殺フランクション！」

『アタックフランクション Xブレイド』

グラディエーターはX字にグラディウスを振り、その衝撃波をカイザーディアンに当てる。

カイザーディアンの体力は、半分になった。

ライアン

「どうだ、これで逆転が出来る！」

しかし、皇牙の慌てる様子が見えない。

皇牙

「残念だが、ファイナルブレイクさせてもらっ、必殺ファンクション！」

『アタックファンクション カイザーサイクロンフィニッシュ』

カイザーディアンはメーザーアイで攻撃し、パンチ応酬でダメージを与え、カイザーバスターで上空に上げた。

自らグラディエーターまで飛び、回転パンチをぶち当て、グラディエーターは地面に叩きつけられ、戦闘不能になった。

零斗

「勝者！王原皇牙ぁーーーーー！！！！！！！！」

そしてライアンは、グラディエーターを自分の肩に乗せる。

ライアン

「確かに、ヤバかった。けどいつか君に勝つ」

そう言ってマイティドリンクを手に取り、飲んだ。

飲み干した後、気絶する。

倒れたライアンを見て姫子は「ライアン君！ライアン君！」と駆けつける。

姫子

「酷い、私がかんとかしないと……」

姫子はライアンのベルトを外し、ズボンを脱がそうとするが、箒に

止められる。

姫子

「離して篠ノ之さん！ライアン君を助けなきゃならないの！」

箒

「ダメだ！これ以上越したら大変な事になる！」

姫子は必死に抵抗するが、箒は離そうとしない。

結局、ライアンは保健室に運ばれたという。

地中海遺跡のジオラマがDキューブに戻り、零斗はそれを拾った。

零斗

「では、決勝戦！生き残った俺とキンジとアックスとカーリーナとタツヤと皇牙でバトルロワイアルをしたいと思います！」

そして生徒達は盛り上がる。

零斗は懷からDキューブを取り出し、それを黒板の近くに投げる。

Dキューブは現代都市のジオラマのステージとなった。

零斗達はそれぞれジオラマの周りの位置についた。

零斗

「じゃあ行くぜ！ホープ！」

ホープはフィールドに移動した。

キンジ

「ズール！」

アックス

「オルテガ！GO！」

カリーナ

「行きますわよ！アマゾネス！」

タツヤ

「行け！ウォーリアー！」

皇牙

「カイザーディアン！」

零斗の以外のLBXがフィールドに移動した。

零斗

「バトル開始！」

合図と共にウォーリアーは早速アマゾネスに攻撃する。

カリーナ

「早速攻撃ですよ！？」

タツヤ

「バトルロワイアルなんだろう？」

アマゾネスはウォーリアーの攻撃をハードバックラーで防ぎ、パル

チサンで攻撃し、ウォーリアーに攻撃のチャンスを許さないかのよう
に攻撃する。

タツヤ

「くっそ！ 防御できねえ！」

するとカイザー・ディアンに吹き飛ばされたズールが現れ、ホープに
吹き飛ばされたオルテガが現れた。

二体とも体力がわずかである。

カリナ

「行きますわよ！ 必殺ファンクション！」

『アタックファンクション トライデント』

パルチサンから集まったエネルギーが出て、ウォーリアーとズール
とオルテガに向けて左右正面に放ち、三体同時に喰らい、戦闘不能
となった。

タツヤ

「うわぁーーーーー終わったぁーーーーー！！！！！」

翔子

「たっくん……………」

そして負けた姿を涙目で見える翔子であった。

零斗

「覚悟しろよカリナ」

カイザーディアンはカイザーダブルナツコオでアマゾネスにダメージを与え、カイザーバスターを喰らわせた。

アマゾネスは、戦闘不能になった。

残ったホープとカイザーディアンは、対峙していた。

零斗

「さあ、決着をつけようぜ皇牙」

皇牙

「そうだな、零斗」

二体のLBXは同時に走り出し、打ち合う。

ホープはカイザーディアンの腕を掴み、自分の身に寄せて膝蹴りをし、カイザーディアンはホープの腕を掴み、背負い投げをする。

零斗

「やるな皇牙」

皇牙

「お前もな、零斗」

ホープはバク宙して距離を取る。

その時、カイザーディアンはカイザーダブルナツコオを繰り出し、ホープはそれをかわす。

これを見た生徒達は、青ざめる。

零斗

「という事で、学級委員長は俺に決定いたしましたぁー！！！！！！
ー！！！！！！あ、負けた人はマイティドリンク飲んでね！」

こうして、バトルロワイアルに負けた人達は、マイティドリンクを
飲み、「オボoooooooooooo！」と倒れていった。

零斗

「これでもう、雪蓮先生は苦労しないで済むぜ」

そう安心していると、チャイムがなり、零斗は教室の時計に向く。

時計は、十二時になっており、沈黙な空気になった。

八話！ 学級委員長をかけたLBXバトル！負けたら罰ゲームね（後書き）

次回、異種武闘世界大会編を開始します！

零斗

「あ、そうだ。ここで自分の作品のキャラをゲスト出演させたい人は、感想かメッセージでお願いします。締め切りは異種武闘世界大会編の始まりです。それとオリジナルLBXは、異種武闘世界大会編の終わりまで締め切りです」

龍の骨

「それともう一つ付け足しです。オリジナルLBXの必殺技の詳細も忘れないでください。皆様が考えたオリジナルLBXを待っています」

九話！ 特訓！？フランケン**の必殺技発動！（前書き）**

零斗

「今回はフランケンが主役みたいになるぞぉ」

フランケン

「主役みたいって……」

零斗

「タイトルの通り、フランケンが必殺技を出しますので、楽しみにしてください」

九話！ 特訓！？フランケン**の必殺技発動！**

零斗が委員長が決まって一ヶ月、BSAA学園は夏休みに入った。

異種世界大会はあと十日、零斗達はそれに向けてバトルグラウンドで特訓をしている。

因みに、ツツコミ役としてフランケンは零斗達の特訓を見る。

フランケン

「俺ツツコミかよ！？」

だって、一期ではツツコミを沢山入れてるじゃん。

フランケン

「だからってそれは……………」

零斗

「フランケン？誰とお話してんだ？」

フランケン

「何でもないよ」

零斗はフランケンの様子を見て首を傾げる。

皇牙は破天荒真拳を駆使し、ダイチを圧倒させる。

しかしダイチは気力で体勢を立て直し、構える。

たけしは一刀と木刀で互いに打ち合っていた。

タツヤは炎を手と足に纏い、サンドバックでジークンドーの鍛錬をし、ソウスケは刀を構え、置いてある木を斬るという居合いの鍛錬をしていた。

零斗は皇牙達の特訓からフランケンに目を向ける。

零斗

「お前も世界大会に出たくないか？フランケン」

フランケン

「俺は良いよ、フェンシングは得意だけど世界に向けるレベルじゃないし……」

とフランケンは少しマイナスな発言をし、零斗は手をフランケンの肩に置く。

零斗

「だからこそ特訓をしてんじゃねえか。見ろよ」

フランケンは世界に向けて特訓をしている皇牙達を見る。

零斗

「だからさ、世界に向けて特訓しようぜ」

フランケンは零斗の言う事に頷く。

零斗

「決まりだな、じゃあ俺が見てやるから準備しとけよ！」

フランケン

「ああ！」

こうしてフランケンは、零斗と特訓をするのであった。

【イタリア グラン・サツソの黒い教会】

キジユジユで生き残った村人が入っている檻の前にはセスがあり、その後ろでは頭にターパン巻いて、白い仮面を着けている集団『処星』がいた。

セスは檻から男を出し、処星二人は刀を持って抜刀する。

その様子を傍観するテル達。

男

「お願いです！命だけは、命だけは！！！」

セス

「これはテル様の為だ。悪く思うな」

村人は命乞いをするが、セスは構わず処星に指示をする。

処星は刀を振り上げ、男は逃れるように暴れ、処星達は抑える。

セス

「やれ！」

セスの掛け声で、処星は村人を斬る。

これを見た村人達はわめく。

テル

「セス、もう良いだろう。村人を牢屋に連れて行け」

セス

「しかしそれでは、闇が集まりません」

テル

「こいつらを殺しても、闇が集まらない。明日からは奴隷として使う」

そしてテルは影星達を村人達を牢屋に入れるように指示をし、影星達は村人を檻から出し、牢屋へ連れて行った。

処星達は、死体を棺桶に入れ、運んだ。

テル

「行くぞ……………」

部屋から出て、食堂へ向かった。

【バトルグラウンド 組み手の場】

ここは、戦士と戦士同士で組み手をし、己を強くしたり相手と語り合う部屋である。

そこに立っているのは一刀とフランケンである。

因みに零斗達は場外におり、審判はソウスケになっている。

ソウスケ

「じゃあ、一刀君とフランケン君の練習試合、開始だよ！」

一刀

「フランケン、お前の得意なフェンシング、零斗の特訓で強くなつたか、見せてもらうぞ」

フランケン

「そのつもりだよ！」

ソウスケが「両者構えて！」と言うと、フランケンはレイピアを構え、一刀は刀を抜刀して構えた。

ソウスケ

「始め！」

フランケンはレイピアの突き攻撃をし、一刀は刀で防ぐ。

一刀は横切りで攻撃するが、かわされ、縦切りの攻撃に切り替えるが、かわされる。

連続の突き攻撃に押され、場外までギリギリの所まで行った。

一刀

「零斗の特訓が、生かされているようだな。だったらこれはどうかな？」

刀を構え、赤いオーラを湧き出し、フランケンが首を傾げる。

そして一刀は縦に振ると衝撃波が生まれ、フランケンに向かっていく。

衝撃波が自分に向かって来ることには驚き、思わずよけた。

一刀は次々と衝撃波を飛ばし、フランケンはかわし続ける。

一刀

「ほらほら！よけ続けてると疲れるぞ！」

フランケン

「んな事言われたってえー！！！」

衝撃波をかわし続けるフランケンを見て真剣な顔をする零斗。

零斗

「衝撃波をつまくかわしてるな」

皇牙

「だが、一刀の言う通り。余計体力が消耗する」

ダイチ

「攻めるより、守るほうが体力を使うからな」

フランケンはかわし続け、段々動きが鈍くなっていく。

それでも一刀はやめずに衝撃波を繰り返す。

フランケン

（これじゃあ、余計動きが鈍くなる。まともに受けたら隙が出来てやられてしまう！）

そう思いながら衝撃波をかわし続け、少しだけ髪がかすれる。

すると零斗は立ち上がり、フランケンは零斗に振り向く。

零斗

「フランケン！よけてばっかしてねえで攻めろ！」

フランケンはこれを聞いて気付き、零斗はサムズアップをする。

そして一刀の方へ振り向いた。

一刀

「話は終わったか？じゃあ続きだ！」

再び衝撃波を繰り出し、フランケンはかわしながら進んで行き、レイピアで衝撃波を弾いていく。

一刀

（弾いたか、これで俺に近付こうとしてんな？）

そう思いながら一刀は衝撃波を出し続ける。

その時、フランケンのレイピアが青く光り出し、一刀はこれを見た瞬間出すのをやめ、構える。

フランケン

「うおおーーーー！！！！！！」

レイピアを刺すように突き出し、青い光は矢の様に放たれ、一刀に向かっていく。

一刀

「我流マイティ真拳奥義！紫電いつせ……」

技を出す途中で青い光が直撃し、壁に叩き付けられた。

これを見たフランケンには驚愕する。

フランケン

「これは……」

零斗

「良かったじゃねえか。この技はお前が生み出した技なんだよ」

フランケンに駆け込む、零斗は褒める。

すると一刀は立ち上がり、フランケンに駆け込む。

一刀

「驚いたぜ。あんなに凄い技を出すなんて、他では出来ないぜ？」

フランケン

「零斗、一刀。そして皆」

零斗

「だがな、それではまだまだ世界レベルとは言えないぞ」

これを聞いてフランケンはずっこける。

一刀

「特訓はまだまだ続くぞ。誰か一人、フランケンの相手をする奴は？」

ダイチ

「じゃあ俺がやるよ！」

フランケンの前にダイチが現れ、「俺の相手はどうだ？」とダイチを押して現れるタツヤ。

ダイチ

「おいおい、最初は俺なんだから俺にやらせるよ」

タツヤ

「悪いな、スケベで変人なお前にフランケンの相手は勤まらねえよ」

ダイチ

「んだとデメエ!!!!!!」

タツヤ

「やんのか!?!」

そしてダイチとタツヤは喧嘩をし始め、たけしは止めに入る。

ソウスケ

「あははは・・・じゃあ僕ならどうだい？僕は居合いだけど、結構特訓になると思うよ」

フランケン

「じゃあソウスケ君、お願いします!」

フランケンとソウスケは、互いに武器を構え、零斗の合図で始めた。

【イタリア グラン・サッソの黒い教会】

テルは自分の部屋で窓の景色を見て考え事をしていた。

テル

（異種武闘世界大会か、零斗達も参加するだろうな。僕も参加したいところだが、長がいなくなれば混乱するだろう。それにやる事があるしな）

すると後ろから、『スーパーロボット対戦OGシリーズ』の『ゼンガーII ゾンボルト』を少し若くした男が現れる。

???

「武闘大会か、そのBSAA学園で噂になっている北郷零斗も参加するのか」

テルは男性の声に後ろを振り向く。

テル

「参加するのか? 漸我」

漸我という男性は、テルの言葉に頷く。

おまけ

ウ
ヴ
ア

「うわぁーやめてガメルうー角はコアメダルより大事なもののなの！」

ガメル

「これでナイフを作ってテル様が言ってた……」

ガメルという重量系グリードは、ウヴァの角を取ろうとしている。

ウ
ヴ
ア

「俺の角ではナイフ作れないからね！？つてか出来たとしても弱いから！」

必死に抵抗するウヴァだが、ガメルの力任せに角は折れてしまい、「ぎゃあーーーーー！！！！！」と断末魔のよ
うに叫んでいたのは、言うまでも無い。

ウ
ヴ
ア

「俺はオーズの本編で復活したのに……」

角が折れたショックで滝の様に涙を流すウヴァ。

カザリ

「僕なんか本編では死んでるんだよ!？」

とメタ発言をするウヴァとカザリであつた。

異種武闘世界大会まであと、十日・
・
・
・
・

九話！ 特訓！？フランケンの必殺技発動！（後書き）

処星

「外見」

頭にターパンを巻いており、白い仮面を被る。

「プロフィール」

抜刀術を得意とする処刑部隊

零斗

「以上、烈火竜さんが考えてくれた処星でした！それでは、フランケンの必殺技をこの場で決めます！」

フランケン

「え？どんなの？」

零斗

「必殺技名は……『ライティングソード』です！」

フランケン

「ライティングソードって……良いかな？」

零斗

「次回はなのはと特訓！そして暗黒流星団以外の戦闘員が登場します！」

十話！　なのはと特訓！ソウスケの真拳見せちゃいます！（前書き）

零斗

「なのはと特訓だぞぉ！」

フランケン

「遂に俺の特訓が……」

零斗

「それと暗黒流星団以外の戦闘員が登場するぞぉ」

十話！　なのはと特訓！ソウスケの真拳見せちゃいます！

バトルグランドでは、『組み手の場』でフランケンとソウスケが組み手をしており、零斗達はそれを見守っている。

フランケンはレイピアで突きの攻撃をし、ソウスケは少しだけ刀身を出して受け流す。

零斗

「おお、フランケンが前より腕が上がったな」

一刀

「ああ、確かに上がっている」

フランケンの戦いを見て評する零斗と一刀。

ソウスケ

「凄いなあ、前より上がってるよ。でも……」

素早く居合い切りをするようにレイピアを弾き、喉元に向ける。

ソウスケ

「ちょっと甘い所があるよ」

フランケン

「うう……はい……」

厳しい一言にフランケンは顔を下げる。

ソウスケ

「そこを直せば、世界に通用するようになるよ」

フランケン

「分かったよ」

フランケンは地面に刺さっているレイピアを拾って鞘に収め、フィールドから降りた。

一刀

「大会まであと九日、それまでに特訓しておかなきゃ世界にも通用しない」

皇牙

「そうだな」

皇牙はフィールドに上り、構える。

皇牙

「行くぞ！ソウスケ！手加減はしないぞ！」

ソウスケ

「僕もだよ王原君！」

すると、チャイムらしき音がし、組み手の場のドアが開く。

そこに現れたのは……

なのは

「ここが、零斗君達の特訓している所なんだ」

なのはであり、零斗達の所へ行く。

零斗

「おいおい、何でなのはがここに？」

ソウスケ

「ああ、説明をするよ」

ソウスケは、なのはが異種世界武闘大会へ出ると聞き、零斗達が特訓しているバトルグラウンドで特訓出来ると教え、なのががここに来たと零斗達に説明した。

零斗

「成る程な。だけど大丈夫か？ここが皆にバレたら大変な事になるんじゃないのか？」

ソウスケ

「その辺の所は大丈夫。口外しないようにって言っておいたから」

零斗

「そうか・・・じゃあなのはとフランケンで組み手だ」

フランケン

「え！？ちょっと待ってよ！いきなりエース・オブ・エースと組み手え！？」

なのはと組み手をする聞き、フランケンは驚く。

皇牙

「世界に通用する為には、まず強い相手と戦うんだ」

フランケン

「た、確かにそうだけど・・・」

零斗

「よし！そうと決まれば早速組み手だあ！」

フランケン

「うう・・・」

フランケンとなのははフィールドに上り、フランケンはレイピアを出して構え、なのははレイジングハートを起動させてバリアジャケットを纏った。

零斗

「という事で、フランケンとなのはの、組み手を開始したいと思います！」

フランケンはなのはを見て構える。

零斗

「では・・・始め！！！」

なのはの周りに桜色の多重魔力弾が浮き、フランケンに向かっていく。

フランケン

「なっ！」

フランケンはずいぶん魔力弾をレイピアで弾いた。

だが、魔力弾は出てきてフランケンに向かっていく。

フランケン

（僕が押されている・・・このままじゃやられるのがオチだよ）

フランケンとなのはの戦いを見ている零斗達は・・・

皇牙

「押されているな」

一刀

「このままじゃ、一回戦で直ぐに負けるな」

皇牙と一刀はフランケンの戦いを見て不安な一言をする。

フランケンは弾き続けるが、腹と右膝に受ける。

フランケン

「うわぁ！」

そのまま右膝を落とし、なのはを見る。

なのは

「どうしたの！そんなんじややられちゃつよ！」

右膝にダメージを負いながらも魔力弾を弾き続けているフランケンを見て零斗は立ち上がる。

零斗

「フランケン！カウンターは基本だと教えた筈だぞ！」

フランケン

「え！？」

零斗

「そんなんじゃ一回戦であっさり負けるのがオチだぞ！」

フランケン

「……………」

フランケンは右膝を上げ、レイピアを構える。

フランケン

「いきますよなのはさん！僕は本気でいきます！」

なのは

「その意気だよフランケン君！」

魔力弾はフランケンに向かっていき、フランケンは弾きながら走る。

フランケン

「喰らえ！」

レイピアですさまじい突きを繰り出し、なのはは正面に魔方阵を展開させて防ぐが、足元がフィールドのギリギリまで押される。

なのは

「うう、凄いよフランケン君。じゃあ私も本気でいこうかな！」

なのは

「す、凄いよフランケン君」

なのははレイジングハートを杖にして立ち上がり、フランケンを見る。

一刀は立ち上がり、フィールドに上る。

一刀

「良く頑張った。だが、世界にはなのはよりもっと強い奴がいる。それを忘れずに」

フランケン

「分かった！」

ソウスケ

「基本のカウンターから逆転を狙うというのは良かったよ！」

フランケン

「ありがとう！」

零斗

「よっしゃ！という事で、フランケンは逆転を狙ったという事で、俺とフランケンが組み手をするぜえ！」

フランケン

「ちよっと零斗！？」

皇牙

「そうだな。なんなら、俺との組み手でも構わないが」

零斗

「よっしゃー！じゃあ早速、組み手開始だぁー！！！！！！」

その頃、暗黒流星団は……………

テル

「何？交戦中？」

影星

「そのようでございます。バトルグラウンドへ行く途中、謎の戦闘員に接触してしまってしまい、交戦状態になっております」

テルはテーブルに置いてある水晶玉に向かい、手を水晶玉に当てる。

すると影星達が『仮面ライダーアクセル』に登場したコマンダード・パントの分身体に酷似した一つ目で無機質なフェイスと防弾チョッキを模したライダースーツ人間に近い外見をし、白黒で統一されている集団と戦っていた。

テル

「……………」

影星

「テル様！？」

テルはこれを見て黙って出口へ向かった。

テル

（あれはソルジャードーパント。作るとしたら、あの会社しかない）

場所を戻し、バトルグラウンドでは…………

零斗

「ん〜！特訓した汗を流すのは気持ち良いよなあ〜！！！」

零斗は背伸びをしているが、フランケンも息が上がっていた。

フランケン

「零斗…………これが世界に向けての特訓か…………」

ソウスケ

「そうだよ。どの武闘家もこういう鍛錬もしてるんだよ」

フランケン

「そ、そうだったんだ…………」

零斗

「さて…………今回はこれでおしまい！家に帰って身体を休め…………！」

こうして零斗達はバトルグラウンドから出て家に帰ろうとした。

その時…………

目の前にソルジャードーパントが現れ、零斗達は警戒する。

零斗

「何だお前等は！」

ソルジャードーパント

「北郷零斗だな？」

零斗

「俺の事か？そうだが」

ソルジャードーパント

「ならば……」

ソルジャードーパント達は特殊ロッドを取り出し、構える。

零斗

「やるつてのか？上等！」

フランケン

「あのさ、零斗。それで戦うの？」

零斗

「ああ、超伝説の肩たたき機セイバーでな」

フランケン

「それただの肩たたき機じゃん！」

肩たたき機セイバー？を持っている零斗にツッコミを入れるフランケン。

零斗

「さあ行くぜ！」

五人で襲い掛かってくるソルジャードーパントに、零斗は走り出し、

フランケン

「すんごく嫌な技だぁー……!!!!!!!!」

なのはは一刀の解説に顔を赤くし、フランケンは思わず叫ぶ。

零斗

「さぁ、お前等！いくぞぉ！」

フランケン

「じゃあ、行こうか！」

ソウスケ

「ああ、ちょっと待って！この大群、僕にやらせてくれないかな？」

なのは

「ええ！？」

皇牙

「あれをか！？」

これを聞いたなのはと皇牙は驚く。

零斗

「いいだろう！」

一刀

「おい！」

フランケン

「良いのかよ！？」

零斗

「ソウスケには真拳があるんだよ。その披露を見てやるっぜ」

そしてソウスケは居合いの構えをする。

ソウスケ

「行くよ！」

襲い掛かってくる十体のソルジャードーパントに、居合い切りをするように走り抜いた。

刀を鞘に収めると、十体のソルジャードーパントは一斉に倒れた。

フランケン

「ええ！？どうなってんの！？」

何があったか分からなく、フランケンは驚きを隠せなかった。

ソウスケ

「ソニック真拳……………」

フランケン

「ソニック真拳！？」

ソウスケ

「これは、僕が速さを求め、居合を極めて作られた真拳。簡単に言えば、スピードと居合を合わせた真拳と呼ぶね」

なのは

「これが、ソウスケ君の真拳……」

フランケン

（そうなのか……そんな凄い真拳を持ってたなんて初めて知った）

なのはとフランケンはソウスケの真拳に驚きを隠せずにした。

ソウスケ

「そしてさっきやったのは、ソニック真拳奥義、ソニックブレード」

ソウスケは再び居合の構えをする。

ソルジャードーパント

「ふざけるな！我々をたった一人で相手するなど、笑わせる！」

・
ソルジャードーパント達は一斉にソウスケに襲い掛かるが……

ソウスケ

「ふふふふ、ソニック真拳奥義……」

目にも止まらぬ速さ剣を振り回しながらソルジャードーパント達へ突っ込む。

ソルジャードーパント達を抜いた後、刀を鞘に収めた。

ソウスケ

「モーレツソニック！」

後ろにいるソルジャードーパント達は一斉に倒れた。

フランケン

「す、凄い！」

零斗

「どうだった？ソウスケのソニック真拳は？楽しめたかい？」

ソウスケ

「大会が楽しみだな」

こうして零斗とフランケンは一刀と皇牙とソウスケとなのはと別れた。

フランケン

「さっきの奴等、一体何者なんだろう？」

零斗

「ああ、テルの所の奴等じゃないって事は確かだ」

零斗とフランケンはソルジャードーパントが来た事に疑問を抱いていた。

零斗

「けどよ、暗黒流星団の他に俺を狙う奴等がいるんじゃないかと思うんだよね」

フランケン

「……………」

その後、零斗とフランケンとは別れた。

大会まであと九日……

十話！　なのはと特訓！ソウスケの真拳見せちゃいます！（後書き）

ソルジャードーパント

武器　特殊ロッド（状況に応じて高圧電流　高熱、冷気を流す事が可能）

『兵士』の記憶が込められたガイアメモリに変身する下級ドーパント。

Vシネマ『仮面ライダーアクセル』で登場したコマンダードーパントの分身体のコマンドに酷似した、一つ目で無機質なフェイスと防弾チョッキを模したようなライダースーツを纏った人間に近い外見をしているが、ボディの色は白黒で統一している。

Wで登場したマスカレイドドーパント同様に特殊能力を持たず、通常の武器の他、戦い慣れた人物の格闘でも倒せ、倒されるとメモリブレイクせずに消滅する。

零斗

「以上！charleyさんからの戦闘員でした！そして次回は！ニヤンダフルパティシエとうさぎんアイドルとグラビティガンナーが暗黒流星団の刺客として登場！劉備先生と曹操先生と共に3ストライクのデスマッチで対決だ！次回！『激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃい！』」

フランケン

「ど、どうなるんだ！？」

激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃい！（前書き）

零斗

「今回は、クイーンズゲイトのキャラが登場するぞお！」

フランケン

「嫌な予感が……」

激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃい！

新宿の公園では、零斗と劉備ガンダムと曹操ガンダムとフランケン
の四人でラムネジュースを飲んでいた。

零斗

「やっぱ良いね〜ラムネジュースは」

劉備ガンダム

「ホントだなあ〜」

曹操ガンダム

「ついでにカレーパンも欲しいよねえ〜」

フランケン

「あの〜ラムネにカレーパンって合うんですか？ってか欲しいって・
・・・」

曹操ガンダム

「激辛の物で・・・」

フランケン

「合いませんってそれ！激辛カレーパンとラムネは合いませんって
！」

激辛カレーパンとラムネは合わないと曹操ガンダムにツツコミを入
れた。

零斗

「それよりさ。つまないね、最近暗黒流星団の動きが無くて」

フランケン

「何言ってるんだよ。だからこそ油断しちゃダメなんだよ。それに、昨日の奴等も零斗を狙って来ていたし」

零斗

「それもそうだよなあ」

そう言っただけで零斗はラムネジュースのビンをゴミ箱に捨て、劉備ガンダム達も捨てた。

すると……

???

「あいつが北郷零斗ね」

???2

「確か金山企業を滅ぼしたマイティ真拳使いです」

???3

「ホントかな」

目の前に三人の少女が現れ、零斗達は止まる。

零斗

「何だ！てめえ等は！」

???

「あたしはニヤンダフルパティシエのアリユッタカトウス！」

???2

「うさぎんアイドルのルーナです!」

???3

「うちはグラビティガンナーのアイネ」

劉備ガンダム

「んだよおめえら!やんのかゴリア!」

リーゼントとヤンキー姿の劉備ガンダムが喧嘩を売るような事を言っていた。

アリユッタ

「あんたに頼みたい事があるんだけど」

零斗

「頼みい?何だ!」

アリユッタ

「あたしの為に、倒されなさい!」

フランケン

「ええ!?!」

これを聞いたフランケンは驚き、零斗は指を鳴らす。

零斗

「お前の為に?ふざけんな。はいそうですかと、やられる俺じゃねえよ」

アリユッタ

「そう、ならば力づくでも倒してやるわ!」

劉備ガンダム

「上等だゴラァ! かって来いよぉ!」

フランケン

「まだ着てたの!？」

劉備ガンダムがまだリーゼントとヤンキー姿になっている事にツッコミを入れた。

零斗

「なあ、こうしようぜ!」

ルーナ

「何をこうしようぜなんですか?」

零斗

「三対三のデスマッチ、3ストライクで勝負をつけるってのは」

アイネ

「3ストライクってなんなん?」

3ストライクとは、三人一組に組んで戦うデスマッチである。

主に、真拳使いがこれで戦っている事が多いとか。

アリユッタ

「ふうん、じゃあ丁度いいじゃない！」

零斗

「じゃあ、俺は劉備先生と曹操先生で行く。フランケン！ツツコミ
役を頼む！」

フランケン

（結局こうなるんだね・・・）

零斗

「よし！それじゃあバトル開始だ！」

零斗の掛け声により、バトルが開始された。

「まずは俺からだぁー！ー！」と零斗は八工叩きでアリユッタに
攻撃を仕掛け、アリユッタは右腕に着けているニヤントレットで防
ぐ。

アリユッタ

「何で八工叩き！？」

零斗

「ぐっ！ダメか！妖刀八工叩きでは！」

アイネ

「妖刀八工叩きってまんまやないか！」

横からアイネがツツコミを入れた。

アリユッタ

「つてか離れなさいよ!」

ニヤントレットで押し返し、零斗は着地する。

零斗

「こうなったら!マイティ真拳奥義!ゴロゴロアタアーーック!
!」

身体を横にして転がってアリユッタに突進する。

アリユッタ

「鬱陶しいわあ!」

零斗

「ぎゃばーーーー!」

が、鬱陶しさにイライラしたアリユッタに蹴飛ばされた。

一方劉備ガンダムは……

劉備ガンダム

「うわあーーーー!!!」

ルーナ

「ララララ」

ルーナが放つにんじんミサイルをかわしていた。

劉備ガンダム

「バカあ!にんじんミサイルを喰らったら、俺がどうなるか分かっ

てんのかよ!?!」

ルーナ

「そんなの知らないです」

にんじんミサイルが劉備ガンダムに集中攻撃し、劉備ガンダムは「ギヤアアーーーー人参になるーーーー!」と叫んだ。

フランケン

「劉備先生えーーーー!」

煙が晴れると、劉備ガンダムは人参になっていた。

劉備ガンダム

「いててて」

フランケン

「人参になってるーーーー!」

劉備ガンダム

「いやぁ危なかったぜ。もう少しで人参になるところだったぜ」

フランケン

「いやいやいやいや人参になってますよ!?!」

劉備ガンダム

「あ!俺人参になってる!」

劉備ガンダムは自分が人参になってる事に気付いた。

曹操ガンダムは……

曹操ガンダム

「うおおーーーー余のカレーパンを食ええーーーー！！！」

両手にカレーパンを持ってアイネのグラビティマグナムをかわしていた。

アイネ

「何なんや！こいつ！」

曹操ガンダム

「余のカレーパンを食ってくれえーーーー！！！」

アイネ

「ああもう！しつこいわあーーーー！！！」

曹操ガンダム

「ギャアアアーーーー！！！」

アイネのグラビティマグナムを喰らい、曹操ガンダムは悶える。

零斗

「くそお、あいつら強え」

劉備ガンダム

「何なんだ？あの強さは」

曹操ガンダム

「余のカレーパンを食べてくれなかった……」

アリユッタ

「マイティ真拳ってこの程度？」

アイネ

「大したこと無いやな」

零斗

「マイティ真拳がこの程度？見縊るなよお前等、マイティ真拳というのは無限の可能性があるんだ」

アイネ

「その無限の可能性、本当にあるのか？」

零斗

「あるぜ。嘘だというのなら見せてやるよ！」

そして零斗は白いオーラを出し、腰を落とし、両手首を合わせて構える。

零斗

「マイティ真拳奥義……」

電気が集中し、だんだん大きくなる。

零斗

マイティ
「電撃聖自在波！！！！」

電気の球を放ち、アリユッタ達は吹き飛ばされる。

零斗

「マイティ真拳の可能性、思い知ったか！」

アリユッタ

「くっ・・・確かに凄いわね・・・」

零斗

「後アリユッタ！お前、男が嫌いらしいな」

アリユッタ

「そうよ！男が嫌いなのよ！って何で知ってんのよ！」

零斗

「マイティ真拳奥義、サーチアイで分析したぜ」

アリユッタ

「にやっ！勝手に分析しないでよ！」

零斗

「そしてついでにお前らも分析させてもらった」

ルーナ

「ええ！」

アイネ

「分析って・・・」

零斗に分析されたのか、ルーナ達は動揺する。

フランク

「おい——！！！！お前等やめろ——！！曹操先生が死んじやうだろお——！！！！」

そんな零斗達にツツコミを入れるフランケン。

煙が晴れると、アイネ達は倒れており、曹操ガンダムは立っていた。

フランケン

「はあく良かった……」

曹操ガンダムが無事と分かり、フランケンがホツとするが、「まだ生きてたのかぁーーーー！！！」と零斗がバズーカで曹操ガンダムを攻撃する。

フランケン

「先生え——！！！！！！！！！！」

アリユツタ

「くっ……なんて無茶苦茶な奴等なの!？」

ル
ー
ナ

「ハジケ過ぎというか……」

アイネ

「常識破りやろ……」

零斗達の攻撃を受け、アイネ達は立つ。

零斗

「さあ、マイティ真拳の真髄はここからだ！」

アイネはグラビティマグナムの弾を足元の周りに撃ち、自分の周りに赤いフィールドを展開させる。

すると地面に撃っていた弾が浮いた。

アイネ

「その真髄とやらを、見せてもらいますえ！オクタブルバレット！
！」

赤いフィールドから青いフィールドに変わり、弾は零斗に向かっていく。

零斗

「なんの！マイティ真拳奥義！劉備先生ガード！……！」

劉備ガンダム

「うわぁバカぁ……！！！」

零斗は劉備ガンダムを盾にしてアイネのオクタブルバレットから守った。

零斗

「そしてそのまま劉備先生マグナム！」

劉備ガンダム

「ギャア……！！！」

劉備ガンダムを殴り飛ばし、アイネがかわしたことにより電柱に激

突する。

零斗

「よくも劉備先生をおーーーー絶対には許さあーーーーん!!!!!!」

アイネ

「いやあんたやろ!!!!!!うちは関係ないで!!!!!!」

アリユッタ

「それでも喰らいなさい!!」

曹操ガンダム

「ギャアーーーー!!!!!!!!!!!!」

アリユッタのニヤンダーウィップに捕らえられた曹操ガンダムは電流を流されて痺れている。

ルーナ

「ほらほら~~~~やられちゃうよ~~~~」

劉備ガンダム

「うわあーーーー!!!!!!」

ルーナのマイク攻撃に劉備ガンダムは悶えている。

劉備ガンダム

「つてやられているぜえーーーー!!!!!!!!!!!!」

ルーナ

「キャアアアアアーーーー!!!!!!!!!!!!」

劉備ガンダムはルーナに無数のパンチを浴びせ、アッパーを喰らわした。

そしてそのまま倒れ、気絶した。

アイネ

「ルーナ!？」

ルーナ、脱落。

アイネ

「くっ、よくもルーナを……」

零斗

「まず一人。これからお前等にマイティ真拳の恐ろしさを教えてやる」

アリユツタ

「恐ろしさですって!？」

零斗

「いくぞお!マイティ真拳超絶奥義い!!マイティ超常現象5!!」

アイネ

「超常現象!？」

零斗

「お前等に五つの超常現象を受けてもらっ!まずはこれだあ!」

周りがお花畑になり、アリユッタとアイネは困惑する。

後ろを振り向くと……………

進鵜

「よう……………」

ハスナ

「嫉妬のオーラを感じてここに来ました」

激情態の進鵜と狂獣態のハスナがいた。

フランケン

「恐ろしいのが来たあ……………!!!!!!」

これを見たアリユッタとアイネは青ざめる。

零斗

「超常現象の一つ目は、激情態と狂獣態のお二人組みだぜえ!!!!!!」

進鵜

「覚悟しとけよ」

ハスナ

「ええ、特にアリユッタさん」

アリユッタ

「い、いやあ……………!!!!!!」

零斗

「さあて三つ目はあ……………」

アリユッタ

「ん？…………ええ——————！！！！！！」

向こうから双角鬼の大群が走ってくる所を見てアリユッタは驚愕する。

そしてそのままアリユッタとアイネを吹き飛ばした。

零斗

「三つ目は、双角鬼達の突進！！」

フランケン

「それ一期でやってたよね！？」

フランケンは三つ目の超常現象は一期でやったとツツコミを入れた。

零斗

「オラオラオラ！！まだ二つ残ってるぞ！」

アリユッタ

「も、もう勘弁して……………」

零斗の隣に、サービスマンがおり、アイネとアリユッタは青ざめる。

サービスマンは「サービィー！ス！！」と叫んで布を捲り、アイネとアリユッタは青ざめながら手で目を防いだ。

零斗

「四つ目は、サービスマン!!!!」

フランケン

「すんごく嫌な超常現象だぁ————!!!!!!」

零斗

「さぁ、五つ目の超常現象だ。覚悟しろ……」

アリユッタ

「いや、私達帰ります……」

アイネ

「あんたのマイティ真拳の恐ろしさも分かったし……」

そして二人は帰ろうとするが……

零斗

「そうか、ならば五つ目の超常現象を受けてから帰れ」

「え!?!」と二人は振り向き、零斗は白いオーラを漂わせている。

零斗

「五つ目はぁ————!!!!!!」

走ってくる零斗に「来ないでえ————」と涙目になるアリユッタとアイネ。

アリユッタ アイネ

「「いやぁ————!!!!!!」」

零斗

「マイティ真拳奥義！マイティ アッパーカット聖自在昇竜！！」

マイティ アッパーカット

聖自在昇竜で吹き飛ばした零斗は着地し、アリユッタとアイネはそのまま地面に叩きつけられた。

零斗

「マイティ真拳の恐ろしさ、思い知ったか！」

こうして、アリユッタとアイネとルーナに勝利した零斗達は、それぞれ家に帰っていった。

その頃、暗黒流星団は……

テル

「零斗、まさかここまで強くなっているとはな」

水晶玉で零斗達とアリユッタ達が戦っている所を見ていた。

ウヴァ

「どうするんだ？」

テル

「決まっている、大会に参加する」

ウヴァ

「だが、リーダーはお前だぞ。その指揮をどうするんだ？」

テル

「その時は、お前に任せる」

テルは部屋から出ていった。

テル

（これは楽しみだな。零斗、お前と戦うのが楽しみになってきたぞ）

怪しい笑みを浮かべながら零斗との対戦を楽しみにしているテルであつた。

激闘！？3ストライクの勝負は上等じゃい！（後書き）

零斗

「ふうゝあの三人、結構やるな」

フランケン

「ってか、零斗の所為でトラウマが……」

零斗

「おっ！次回は俺の後輩が来るぜ！次回！『真拳六兄弟！って俺の後輩！？』」

フランケン

「どんな後輩なんだ！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659s/>

三学年だよっ！BSAA学園！

2011年11月23日13時53分発行